山岸文庫蔵『練行啓』解題・翻刻

牧野和夫
矢口郁子

本書は、山岸文庫蔵表白・唱導関係書物の一つであり、既に『実践女子大学文芸資料研究所年報』15号（一九九六、三）に影印を掲載している。奥書にあるように昭和十七年の写本であるが、その底本（彰考館旧蔵）を焼失して、他に伝本の所在は確認できない。

簡単な書誌事項を記しておく。

山岸文庫蔵　（2309）
練行啓　〔昭和十七年山岸徳平令写（原田暁庵）〕　大一冊

① 紺布張帙入り、渋引表紙（27・3×19・2糎）、左肩題簽「練行啓　全」と墨書。右下に双辺朱文印「山岸文庫」（5・0×1・4糎）。
② 扉紙（原表紙模写）、左肩、外題簽を模して単枠（19・1×3・1糎）を設け「練行啓　全」と墨書。右肩「辰一六」を模写。右下に「山岸文庫」印（前同）。
③ 目録「練行啓　上」／院中被修　（「彰考館」（瓢箪形印）を模す）1・オ～1・ウ
④ 「一前待賢門院御忌日表白／南瞻部州大日本國太上仙院凝シ十善之叡襟ヲ一／…／／…」
⑤ 無辺無界、字面高さ約24・0糎、毎半九行（1・オのみ八行）、49・オ本文了
⑥ 50・オ、天辺粗縫紙墨書を模して「右練行啓一巻憑木村太七購得之／延寳八年庚申冬十一月」と。

⑦ 眉上に墨にて注記。やや薄墨にて、字体は本文とは別。従って或は昭和の書写の頃の心覚えメモ注記か。

⑨ 「[四]同院御中陰貝経供養表白」の11・オ1行「「讃之歎之…／…／／…／之芳魂必至畢空之濱抑今日結縁」[已上異本入之]若男／…／／…」と、異本補入箇所は本文と同字体にて、底本別筆とも思われない。全く訓点なく、前後の本文は訓点を施している。

内容は以下の通りである。表の下段には、所収表白の他出資料名を掲げた。

【表白名】	【他資料名】　《　》は本文の一部のみ掲載するもの。
1　前待賢門院御忌日表白	金沢文庫本『転法輪鈔』、宝菩提院蔵同書、三宝院本『〔澄憲表白集〕』(上)9、観智院蔵『表白集安興院』8
2　鳥羽院御遠忌表白	金沢文庫本『転法輪鈔』、宝菩提院蔵同書、三宝院本『〔澄憲表白集〕』(上)10、観智院蔵『表白集安興院』9
3　建春門院五七日法會	金沢文庫本『転法輪鈔』、三宝院本『〔澄憲表白集〕』(上)11、釈迦門院本『〔澄憲表白集〕』3
4　同院御中陰中貝経供養表白	金沢文庫本『転法輪鈔』、三宝院本『〔澄憲表白集〕』(上)12、『澄憲作文集』六十三、観智院蔵『表白集安興院』10、醍醐寺蔵『表白集　笠置上人草』19
5　同院千日御講結願表白	金沢文庫本『転法輪鈔』、宝菩提院蔵同書、三宝院本『〔澄憲表白集〕』(上)13、観智院蔵『表白集安興院』11
6　同院御周忌中男女房一品経供養表白	金沢文庫本『転法輪鈔』、宝菩提院蔵同書、三宝院本『〔澄憲表白集〕』(上)14、観智院蔵『表白集安興院』12
7　奉為同院百ヶ日御八講結願御経供養表白	金沢文庫本『転法輪鈔』、宝菩提院蔵同書(後半欠)、三宝院本『〔澄憲表白集〕』(上)15、観智院蔵『表白集安興院』13
8　奉為同院摂州千僧供養表白	金沢文庫本『転法輪鈔』、三宝院本『〔澄憲表白集〕』(上)16、観智院蔵『表白集安興院』14
9　為前鳥羽大僧正修五十日追善表白	金沢文庫本『転法輪鈔』、三宝院本『〔澄憲表白集〕』(上)17、観智院蔵『表白集安興院』15
10　為穎曲御師五条尼被修追善表白	金沢文庫本『転法輪鈔』、三宝院本『〔澄憲表白集〕』(上)18、観智院蔵『表白集安興院』16
11　安元三年七月五日(高倉院宸筆御八講)	三宝院本『〔澄憲表白集〕』(下)1、『公請表白』7、『拾珠抄』一、『代々宸筆御八講願文等記上』、釈迦門院本『〔澄憲表白集〕』1、《『澄憲作文大体』》
12　叡山童仏事　東谷児四十九日(永暦二年八月十七日・五部大乗経尺文)	宝菩提院蔵『転法輪鈔』、『澄憲作文集』六十二、『法則集』9、釈迦門院本『〔澄憲表白集〕』9

〈注〉『練行啓』目次には（13）「[　]院女房土佐内侍（在山城草闕）一品経源氏」（14）「[　]一品経（在山城草闕）」の標題が見えるが、この二篇は本文中に無い。宝菩提院蔵『転法輪鈔』については清水宥聖「東寺宝菩提院蔵安居院流の唱導書をめぐって」（『和漢比較文学叢書5　中世文学と漢文学Ⅰ』（一九八七、七）所載の目録に拠る。釈迦門院本『〔澄憲表白集〕』については和多昭夫「釈迦門院本澄憲「表白集」をめぐって」（『佛教文学研究（三）』（一九六五、四）所載の目録に拠る。三宝院本『〔澄憲表白集〕』については東京大学史料編纂所蔵の影写本に拠った。当書の上・下巻は書体等が全く異なり、元来別々の書物が合冊されたと考えられているが、現在の装丁に従い同書名で示した。

右表の下段に挙げた「表白集」類のうち、東寺観智院蔵『表白集　安興院』は、一見して『転法輪鈔』「御白河院」帖「院中御逆修」・「於院中被修追善」との類似（表白の配列順序の一致）が見てとれ、『転法輪鈔』からの抜粋かとかつて推定した。また、醍醐寺蔵『表白集　笠置上人草』については既に、所収表白と『言泉集』摘句との一致を指摘し、澄憲関与の「表白集」を「笠置上人草」と見なす認識が鎌倉・南北朝期の仏教界内に存在することを推測した（注1）。『練行啓』1～10は、金沢文庫蔵『転法輪鈔』「表白二　後白河院下」帖「於院中被修追善」部分の表白十篇と対応しており、配列順序も一致する（角川書店『安居院唱導集上』250～259頁）。

それでは本書は、かつての推測通り、三宝院本『〔澄憲表白集〕』（上）や東寺観智院蔵『表白集　安興院』等と同様、『転法輪鈔』からの抜粋と考えてよいものであろうか。ここで『練行啓』を加えることによって明らかになる一、二の点について考えてみる。全篇にわたって異同を確認することはできないが、ある表白について検討し、本文の系統・性格を把握する試みの一端としたい。

4「同院御中陰中貝経供養表白」を取り上げる。建春門院没後、経典と共に貝合せの貝が供養された。女院の近習侍女たち五十八人が経典書写にあたったという。以下、金沢文庫本『転法輪鈔』（引用中は（轉））、『澄憲作文集』六十三（同様に（澄））、醍醐寺蔵『表白集　笠置上人草』19（同様に（醍））の三本を対照させ、主要な異同箇所を整理してみたい。『練行啓』本文の後に他本文を示す（注2）。

① 冒頭部分（9・ウ～10・オ）

「大日本國、禅定法皇、頻修大善ヲ一、【　　】三寶ニ一、今圖普賢願王一鋪、寫大乗真文【　　】ヲ、重テ潔テ身口意之底ヲ一、白佛法僧之前ニ一、」

（澄）＝「啓白　大日本国…」、以下は同文　（醍）＝同文

（轉）＝「前院ノ女房男房近習舊労同クシ情ヲ共ニシテ誠ヲ含ミ悲ヲ拭テ涙ヲ圖シ普賢ノ願王ヲ寫シテ一乗真文ヲ異口同音ニ白シテ三寶ニ言サク」

②（10・オ）

「故修善心無止、追福志弥切者也、」

（澄）・（醍）＝同文　（轉）＝「是以戀恩徳ヲ之思ヒ無シ退コト祈菩提ヲ之志又深カシ」

③（11・オ）

「仍、重テ廻シ叡慮ヲ一、倩致シ御ニ思惟ヲ一、此物雖卑シト一、」

（澄）＝「重テ」ナシ、他は同文　（醍）＝同文

（轉）＝「思惟而渉リ日ヲ僉議而送ル月ヲ、爰舊臣侍女相語之此ノ物雖モ卑」

④（11・オ）

「空ク棄ハ似タリ無情ケ一、徒ニ置カハ自ラ〔和〕塵ニ一、法皇戀古ヲ一可携ヘ御覧一、臣妾慕テ恩ヲ一可開テ拝見一、側ニ聞ク」

（澄）＝「空ク」ナシ、他は同文　「可開拝見」＝（醍）「戴拝見」、他は同文

（轉）＝「空ク」から「測聞」までこの部分ナシ

⑤（11・ウ）

「但如スル此一皆世俗トハ礼儀也」

（澄）＝「但為レ如」他は同文　（醍）＝同文

（轉）＝「准ヘテ之レニ思ニ之ヲ捧持終日ニ可シ頂戴ス拜見シテ竟夜可シ悲歎ス然而是只人間ノ禮儀也」

⑥（11・ウ）
「以祈出離之縁ヲ一思食者也、即仰ク、親戚（セキ）戀フ徳ヲ一月卿雲客」
「以祈」＝（澄）「祈ンニハト二」、「出離之」＝（澄）「出離ノ」
（醍）＝同文　（轉）＝「敬テ以祈滅罪之計ヲ即親戚ノ戀ル恩ヲ月卿雲客」

⑦（11・ウ）
「都テ五十八人」
（澄）＝「都テ五十八人云々」　（醍）＝同文　（轉）＝ナシ

⑧（11・ウ）
「合○十八軸、兼又、」
（澄）＝「合一十八巻ヲ一兼又」　（醍）＝「合一十八軸毎年分品戮力成部兼又」、
（轉）＝「合一十八軸」ナシ、「毎年分ケテ品ヲ一戮力ヲ成ス部ヲ」

⑨（12・オ）
「其後素（ソノ）之妙、偏ニ成レリ于宮人ノ丹心ニ一其畫（クワト）圖之様、只出侍女之白業ニ二」
「後素」＝（澄）「後索」、「出」＝（澄）「化二」　「出」＝（醍）「於」
（轉）＝「後素之妙畫圖之様偏ニ出テ、宮人之丹誠ヨリ専成於侍女之白業ヲ」

⑩（12・オ）
「「讃之歎之、誰盡誰窮、閑以、真如巨海本多凡下之魚鱗、無相廣濱不撰無知之螺貝、願其受貝生類、早帰法性之波、願使

其受其觸手之芳魂、必至畢空之濱、抑今日結縁」、已上異本入之」

（澄）・（醍）＝この部分ナシ

（轉）＝この部分アリ。ただし「其受」二字ナシ

⑪（12・ウ）

「仍、且為」～末尾まで

（澄）＝一字ずつ等、些少の違いはあるものの殆ど同文

（醍）＝些少の違いはあるが殆ど同文、但し13・オ「七夕之舊語何悵望」＝「七夕之蔭陽何強望」

（轉）＝本表白末尾の「或本云…」に殆ど同文。「仍命シテ男女五十八人ニ令寫サ経典一十八軸ヲ虚帳垂レテ而無シ主唯有リ夕風ノ飄タル幌ヲ之影一玄堂閇而希人獨見暁ノ月廻軒ヲ之光ヲクミ加之鈿連ノ鏡上ヘニ珠壓ノ影永ク絶玉ノ箱塵中カニ粉黛之具纔カニ留見之争テカ涙不ラム落哉向テ之誰カ腸不ラム断哉天上五衰ノ悲推之轉悟ヌ人間ノ八苦ノ憂就中尤甚ハシ娑婆ノ随逐給使於テ今已テニ絶ヌ安養ノ見佛聞法願ハ當サニ共モニ期ス然則聖霊五障泥澄テ八葉ノ心蓮忽チニ開ラケ六情霜モ晴レテ大智覚日惟レ暖ナラム乃至五道六道悉為佛道ト三乗五乗同為一乗ト御願ノ旨趣大略如此」

⑩・⑪からは、『転法輪鈔』系統の本文をもった本を「異本」「或本」として校訂が行われた痕跡が窺える。それが転写の何時の段階か定かでないものの、模写の字体から判断して、彰考館蔵の底本には既に存し、かなり古くに行われていたものと思われる。この表白については、『練行啓』と『澄憲作文集』・醍醐寺蔵『表白集 笠置上人草』本文が近い関係にあり、『転法輪鈔』本文は対立関係にあるといえよう。⑦・⑧において、書写者「五十八人」、経典「一十八軸」と述べられていた供養の具体性は、『転法輪鈔』では末尾にまとめられている。さらに、『練行啓』において「我君法皇陰陽並テ徳ヲ二十年、宴遊合テ歓ヲ一幾許ノ日ッ」以降は、後白河法皇の悲歎を述べつつ恩愛を断ち成仏を願い、廻向句へと続くが、『転法輪鈔』では施主・後白河の存在が明示されず、その態度は冒頭部分とも対応している。④中の「法皇」の語句が『転法輪鈔』にはない点も同様である。

他表白については、『練行啓』と『転法輪鈔』との関係に、斯様に顕著な相違が表れているとは言い難い。ただし3

「建春門院五七日法會」冒頭に『転法輪鈔』には見られない「次第」が附されたり、部分的に語句の異同があるなど、『転法輪鈔』の転写とは考えにくい点が見られる。

更に、本書の出現によって、次の点が推測可能となる。『練行啓』と東寺観智院蔵『表白集　安興院』の所収諸篇の順序について、看過し難いことは3「建春門院五七日法會」一篇が『練行啓』にのみ存し、他の諸篇は全て順序を同じくして所載されていることである。しかも3「建春門院五七日法會」一篇のみが『練行啓』の中で殆ど訓点のない、白文とも云うべき形態をもっていることである。4「同院御中陰中貝経供養表白」の末に附された「或本云」以下の異文も白文であり、同篇本文途中に双行注記「已上異本入之」を以て示された「讃之歎之」以下の一節（前掲⑩）にも訓点は全くない。即ち、白文系統の諸篇を有した一本を以て、比較し、欠ける一篇を補い、異文を「或本云」として篇末低一格にて附し、更に本文中にも補入本文化したものと思われる。3「建春門院五七日法會」一篇、4「同院御中陰中貝経供養表白」の本文途中の異本補入本文、篇末附載の低一格本文、いずれも現存『転法輪鈔』に同文を見出すものである。

但し、その対校本を現存『転法輪鈔』とすべきかどうかについては、若干の疑義もある。前述の如く、3「建春門院五七日法會」には「次第」が冒頭に附されており、現存『転法輪鈔』にはないのである。

ともあれ、中世前期（旧彰考館蔵本自体の書写年代を推定する手がかりは、山岸文庫蔵の当該模写本以外にはない。おそらくは〔鎌倉南北朝期〕ではないか、と云いうるのみ）において、類本を以て比較対校し、欠を補い、異文を附記する作業が、澄憲作「表白」類の類聚化の過程において、行われていたことになる。

山岸文庫蔵『練行啓』一冊は院政期以降鎌倉時代における改編類聚の作業が、極めて頻繁に僧房の日々の「机上」において行われていたことを生々しい「形」で證する貴重な一書といえよう。

又、既にふれたが、『源平盛衰記』巻三「澄憲祈雨三百人舞」と本書所収12「叡山童仏事　東谷児四十九日」には相互に甚だしく相違した伝承をもつものの、「澄憲」「腰輿」許可など、淵源を同じくする事件に発したものか、と推測される点も附記しておく。

注

注1　牧野「貞慶・澄憲の周辺―「笠置上人草」「解脱上人之作」と題した「表白集」類について―」（『仏教文学』19号、一九九五、三）。なおこの論中にて「十二『言泉集』「入道少納言通ー（憲歟）追善静賢修八講」、山岸文庫蔵『練行啓』に も所収。」（頁六二）とし「十二「静賢法印為先孝法花八講」をとりあげてみる（この表白は既に『練行啓』に所収のものを紹介済）。」とも記したが、『練行啓』には、「静賢法印為先孝法花八講」はない。記憶にたよった結果による誤記であることを明記しておく。

注2　『転法輪鈔』本文は『安居院唱導集上』（一九七三、角川書店）、『澄憲作文集』本文は大曽根章介『日本漢文学論集第二巻』（一九九八、汲古書院）から引用した。

翻刻凡例

一、私意により句読点を付した。

一、改頁箇所を「　」1オ　」のように示した。

一、字体は原則として底本の字体に従った。ただし、一部の異体字・略字・合字等を通行体に改めた場合もある。

一、小字双行・訓点などについては、極力原本の表記状態を復元するように努めた。

一、虫損・破損に相当すると思われる箇所は、山岸氏令写に際しての臨模部分に従って空格とし、字数を類推して〔　〕のように示した。残画などから推定可能な文字については〔　〕に入れて示した。誤字と思われる字については右傍に〔～カ〕と推定を示した。

一、底本には、「○」や「〔　〕」の符号を以て補入・異本注記を示す場合、或は、「二（四イ）」（37・オ、8行）のように左傍に校合符「ー」、右傍に校訂が付される場合、或は、「仏（大イ）」（44・ウ、4行）のように傍記が付される場合があるが、表記通りとした。

一、本文中、敬意表現等によって空格が置かれている場合は、表記の通りを示した。

一、底本の頭記は、山岸氏の手に係る底本の不審字の確認として施されたものと判断し、これを省略した。
一、声点の施された字について、或いは翻印に際して生じた字の不審等について、脚注を付した場合がある。

辰一六

練行啓　　全　（原表紙模写）」（扉紙）

（白丁）」（扉紙裏）

練行啓上
[　]院中被修
[　]門院御忌日一　　二鳥羽院御遠忌二
[　]院五七日法會四　　四同院中陰貝供養五
[　]院千日御講結願六　　同院周忌中男女房一二〔品カ〕経
[　]為同院百日御八講結願七　　八奉為同院摂州千僧供養
[　]羽前大僧正被修五十日追善
[　]曲御師五条尼被修追善
[　]講第四座啓白　」1・オ
[　]三年二〔公家カ〕宗高倉院御自筆御八講
[　]為母儀建春門院施主分
[　]叡山童佛事加経尺等　五部大乗経満山
[　]院女房土佐在山城草鬪内侍一品経源氏
[　]一品経在山城草鬪　」1・ウ

一前待賢門院御忌日表白
南瞻部州、大日本國、太上仙院、凝シ十善之叡襟ヲ一、
［　　］テ一心之精誠ヲ一、圖繪シ三尊之形像ヲ一、書寫一乘之
真文ヲ一、排キ茨山之仙洞ヲ、展供養之梵筵ヲ一御事アリ、
［　　］願旨趣何者、十善瓊録之君モ、四恩之恩ハ尤
［　　］、千代金輪之尊、二親之親ハ惟忝者也、懐ムテ
［　　］ヲ而十月、徳高一須弥之峯一、撫テ、瓊苗ヲ一而多
［　　］四大海之底ヨリモ、是以、送リ歳ヲ一送月ヲ一、戀慕之」　2・オ
［　　］休、経劫ヲ一経生ヲ一、報謝之神襟何故、
［　　］儀聖霊、徳照塗ン山一、道明嫣(セイ)納ニ、承暦ノ聖
［　　］〔猶〕子也、天仁明主之元妃也、然間、配月之徳
［　　］隠レテ切利ノ宮雲暗、捫(ラン)天之夢永ク醒メテ　堯〔尭カ〕母
［　　］風惨(イタムシ)以来、隔花容ヲ一而十七年、別離之悲未盡一、
［　　］瑤裾ヲ幾許ノ日ソ、戀慕之涙無乾、是以、菟園之
昔ノ時、迎聖忌ヲ一偸ニ營斉會ヲ一、鳳闕之新日、携(タツサヘテ)
機務ヲ暫忘ル追善ヲ、方今、汾水春日永、弥思食出(イツ)
慈悲之徳ヲ一、射山秋月閑ナリ、倩欲メス致報恩之志ヲ二」　2・ウ
者也、依之、御願興昔ノ御志ヲ一、善根調今儀式ヲ一御也、
佛ハ西土満月之容(カタチ)、三尊比テ光ヲ一来給ヘリ、経ハ中道垂
露之文、六部貫イテ玉ヲ一調御、梵唄緩ク唱フ、曲似タリ魚
山之風ニ一、法音和カニ暢、聲傳鷲嶺之嵐ヲ一、捧所生
恵業ヲ一、偏奉餝母儀聖霊ヲ一、早歩金縄之路、

「塗」平声、「嫣」平声、「納」去声濁
「〔猶〕」平声、「子」去声、「元」平声濁、「配」去声
「捫(ラン)」＝ママ。「捫(モン)」か。平声、「堯」平声濁、「母」上声
「瑤」平声、「裾」平声

相好重添ム光ヲ一、既坐寶蓮之臺ニ一、瓔珞更ニ増ム
（5字分空格ママ）錺リヲ、嗚呼、昔者万乗之國母也、雖
（5字分空格ママ）施芳訓於紫宮之月ニ一、今者十号
［　　　］ナリ、轉法輪於金刹之風ニ一、娑婆ニハ遺トモ恨ヲ一、浄」3・オ
［　　　］ヲ一、上皇ハ抽トモ報恩謝徳之誠一、聖霊ノ為ナセ
引摂結縁之契ト、納受シ給ヘ、御願旨趣不能委、

二鳥羽院御遠忌表白

南瞻部州、大日本國、禅定法皇、以至孝報恩之
御志ヲ一、營圖佛寫経之斉筵ヲ一、其旨趣何者、世ニ
有四恩一、父母是其一恩也、人有三尊一、親父是其
一尊也、是以、十善ノ身體受於之聖霊ニ一、万乗國位
傳於之聖霊、故、徳高於蒼天ヨリモ一、恩深溟海ヨリモ一、依之、」3・ウ
臨時恒例修善ノ上分、先奉廻向法皇御菩提ニ一、念佛
轉経薫修ノ恵業、先奉祈聖霊ノ得脱ヲ一、故今迎テ聖
忌之朝ヲ一即展追善之筵ヲ一御者也、先臨幸シ御安楽寿院之
斉會ニ一、旁耀シ法筵之威儀ヲ一、更還御シテ勝光明之仙
居ニ一、重テ展フ修善之梵席ヲ、○〻之重疊セル、實報徳
叡慮苦ナル也、善之再三ナル、豈非酬恩之神襟之至レルニ一哉、
三寶垂證明ヲ一、諸天致随喜ヲ一、然則、聖霊、昔ハ娑
婆世界十善主也、今安楽浄土九品聖也、古ハ万行万
善修行器、今上品上生往生之人御歟、」4・オ

三建春門院五七日法會

七僧法會　等身尺迦三尊　金字五部大乗経摺寫法花経

先諸僧参堂　為最勝〈光〉院修之　以御車宿為集會場　次引列（六十部）着堂中　講師右方　読師左方

次登高座　先着礼盤三礼諸僧惣礼　次昇座　先是置香呂呰三衣如意等装理衣服安坐ー

次唄　綱所打磬堂童子引花筥　次散花進仏前　可無行道歟

次講師取香呂開眼　尺迦三尊　次神分　不用祈願　表白

南瞻部州、大日本國、禅定仙院、抽一、心清浄之誠、」　4・ウ
運三輪相応之志、造立尺迦如来五尺之〔尊容〕、兼副
普賢文殊二聖之形像、書写金字紺紙究竟五
部大乗二百余巻、模写一乗妙法蓮花経六十部、屈
六十梵僧、設百大會、御願旨趣何者、夫、如来万徳
之像、早混二月十五之煙、釋提十善之報、必泣五
衰退没之露、凡厥、三界二十五之栖、来皆無永
留、五虫千八百之類、生安有遂存、是以、神無常家、
譬如旅客待明即別、形無常主、譬如籠鳥開
口即去、業力因縁所不辨也、暗而送一生、運」　5・オ
命長短本不知也、愚而期百年、病根萌始騒（サハキ）、
命葉落忽ニ悲、如詐狐失牙走、似拙馬驚骨行、
實悲哉、實痛哉、此○理常中有猶難忍、伏
惟、前建春門院聖霊、早生楊家、久養紅窓、不
知玄雲入戸、黄氣満室、誕生即日忽失悲母、八歳
幼歯重哭慈父、天与之才色、人未測運命、孤露

「最勝院」右に「光」を傍書。補入の意か
小字双行「左方」部分に振仮名あり。「左（サ）方」

「常」字を「○」へ転倒挿入する記号あり

五十二―二　山岸文庫蔵『練行啓』

花貌漸媚、微弱雲鬢獨軟、自然見君王、不慮
奉恩寵、捫天懐日夢忽結、桑〔弓〕蓬矢〔慶〕早
呈、運自之彰、幸因之發、然間、王子備儲君、以母」5・ウ
氏即為女御、儲君踏寶位、立母儀〔即〕［　］大后、爾
来、榮幸日昌、尊宗歳位、冠蓋集門、綺羅照地、
蘭殿椒房内、妭〔妖カ〕艶接裙、玉階金戺下、鵷鸞列
袖、将相遺種、宗室倩依〔清流カ〕、撰為雲客、良家息女、
高門姫君、競為侍女、凡、殿庭之厳、衣服之妙、盡善
盡、窮花窮麗、貫随珠為餝、朝製夕棄、裁
蜀錦為衣、穢汗曳泥、跡絶今古、事希曩代、
光彩生一門、恩榮及九族、兄弟骨肉悉帯文武
顕要、姉妹親戚皆潤湯沐余澤、何況、令亡考」6・オ
朽骨施丞相親名、奉鳳詔尋馬鬣之露、降紫
泥變白楊之風、遂莫不使天下父母軽男重女、〔加之〕、
少帝継位、大后臨朝、万機巨細、四海安危、任之吾
心、誰謂不可、然而、且厭三宮之芳榮、唯楽獨居之美
名、辞琁宮玉堂之抽〔栖カ〕、卜茅洞茨山之幽、榮運猶随
身、権威弥任心、同躰上皇、守徳後宮、如日之有月、
似天之有地、四海訴訟、百官拝除、悉蒙諮詢、皆
致輔佐、助霜露威十年、万方克調、斉陰陽徳
幾日、一天惟静、何唯王室賢妃、實［　］兆民慈母、」6・ウ
然猶、歸心於三寶福田、懸望於〔九〕品浄刹、模安養
花池、迎三尊於祇園之月、建法花道〔場〕、請普賢

「盡善盡」ママ

於懺悔之日、万行漸○林、善根更致茂、竊期今年（○成）
涼秋之比、求解脱同相之衣、儲七分全得之蓄、〔廻〕
十王苛責之瞋、而、有為夢驚、無常悲速来、日暮
路遠、事與願違、六月上旬候、宿霧侵貴躰、臥
病三十余日、摧心幾千万、篇鵲耆婆之術々無
不盡、葛氏蘭家之方々無不極、祈佛祈法、幾
抛瓊林之寶、就顕就密、深仰水月之應、忝」7・オ
自法皇御中丹遍至衆僧精誠、渇仰徹骨、
祈願摧脳、護摩煙燓天、加持響為雷、修其
大法勤其祈祷之輩、東寺則金閣含光崇福
恵朗之倫、天台又玄法々会新羅順暁之輩、各
莫不傳五智之瓶水、翫三密之観月、法力佛力不及、
醫方醫薬不叶、運之更窮、業之至定、只悟定
業不轉、深恨凡心不知、遂以七月八日夕陽西斜之時、
眼瞻一佛像、手執五色糸、最後猶有了語、臨終
全無乱心、唱千反念佛、終一期運命、［　　］不檯」7・ウ
花皃永萎、法皇勧進告出家事、［　　］息鬿之間、
首羅髪先落、神去身冷後、軟雲鬢悉散、見
者抑眼嗚咽、聞者擲身婉轉、万方止市、兆民泣
衢、草憂木憂、況忝於連枝之親春乎、雲惨
風惨、況至於仙洞之煙霞哉、就中、法皇御願、實
遇事理、綺膳忘味仙厨空備、珉席不安御寝
易驚、夕殿螢飛憂火弥盛、秋燭挑盡暁

夢未成、薄暮雲色甚於行宮之月、残更鐘音
越於霖雨之鈴、天旋皇（星カ）轉、日疎月遠、只以事理」8・オ
理善根為御名種（ナクサメ）、以内外追福為御営、三密［　］
摩夜壇、聳智火煙代反魂煙、一乗轉讀［　］
願、悲絶絶御音継新御音、涙非癡愛涙、以萌
菩提種、契非輪廻契、々結浄土縁、凡、自聖霊
遷化日至中陰過半今、修無数善根、營廣大
追福、莫不人驚耳目世致随喜、聖霊近習舊
勞男女、揮涙奉訪善因、尤理、法皇徳水恩
澤之緇素、盡志奉資勝業、實尊、方今、當
五七恩景、修最勝善根、佛則娑婆教主、並」8・ウ
三尊礼両足、経又究竟大乘、〔披〕五［　］一時、十四十
五並月光、五住巨闇悉晴、生蘊熟蘊垂露點、八
苦猛忽、染黄金寫點畫、為雨為、展瑠璃調巻軸、
疑空疑皇（星カ）、嘔六十口夏臈、揚八百軸題名、一讃嘆、
一開講、以訪聖霊、以資聖霊、忽止十王之断罪、
必預三尊来迎、永離五障之塵垢、速坐九品之芙
蓉、諸天證明、三寶納受、嗟呼、除病延命無数
善根、男女追福廣大力徳、聖霊在世事理修因、法
皇、一生定散御願廻之、一向偏資聖霊、超三［　］
一念、證十地於一生、況詣易往浄刹烈塵数［　］」9・オ
努力莫徘徊三有朽宅、穴賢逗留五道舊［　］
非如観音普門應化者、再莫為五障婦女之姿、非如

「理」＝衍字か
「絶」＝衍字か
「八苦猛忽」ママ

妙音現身利益者、重莫為三宮后妃之身、男女追
従之輩、遥期一仏之浄土、緇素結縁之類、必會九品
妙臺、乃至、上自九有之頂、下至八熱之底、離三道流
轉、預千佛汲引、御願旨趣大略如此、具旨有御願
文可奉讀之、

〔四〕同院御中陰中貝経供養表白

大日本國、禅定法皇、頻修大善ヲ一、〔専〕【　】三寶ニ一、今」9・ウ
圖普賢願王一鋪、寫大乗真文〔数句〕ヲ、重テ潔テ身
口意之底ヲ一、白佛法僧之前ニ一、先院國母聖霊、去ヌル月八日、
雨絶ヘ雲散、花萎ミ露消ショリ以来、牛漢カン頻メクテ轉、烏輪如
馳カ一、大ニ暮テ無再ヒ曙アクル之朝タ一、中陰唯残三日之景ヲ一、千
行涙不盡一、千歳別弥隔ル、九廻腸無シテ休コト、九泉ノ路更ニ
遠ル、造佛写経功實ニ繁レトモ輪廻ノ苦楽猶難シ測リ一、梵
鐘浮磬響不トモ絶ヘ一、生死ノ昇沈今ニ無シ告コト一、故修善
心無止、追福志弥切者也、觸テカ何物ニ一成解脱之縁ヲ一、就テカ
何事ニ一催ヲサム浄土之因ヲ一思食者也、爰、聖霊ノ御〔物之〕内ニ」10・オ
有一ノ遊戯之具一、所謂、大海ノ之濱ニ多魚虫類ヒ、其
中有リ一ノ物一、名之蛤ト一、却ステ其腥ナマクサキ身ヲ一洗ハ其鮮ナル貝ヲ一、地有
白色一、上ニ備フ黒文ヲ一、分カレテ二ニ一有歯一、合スレハ一ニ一如生ルカ一、交テ混テ大小ヲ一
破テ覆左右ニ一、見文ヲ一合ス彼此ヲ一、依数ニ一定勝負ヲ一、稱之
貝覆ト一、妭（妖カ）姚ノ常ノ戯也、聖霊久ク携タツサフ此物ヲ一、聖霊常
好ミ御キ此遊ヲ一、其器ノ留テ在塵中ニ一、其遊畢テ如夢ノ一、何為之、
欲ハ安ト之ヲ玄堂ニ一、則顧命恐クハ恥妄想之昔遊ヲ一、欲留

「漢」去声

「媛姚」左傍に「カホヨキヲムナ」と振仮名

之故宮、又見人弥催戀慕之新涙〔ノ〕、夫、錦繍之」10・ウ
衣服以可宛薜衲之資縁、金銀器物以可備
佛寶之荘厳、今至此物者、本是海濱之　鱗　有
憚獻佛界、又即兒女之　玩　不足施夏臈、仍、重廻
叡慮、倩致思惟、此物雖卑、聖霊鎮觸玉手、
此物雖軽、聖霊常備青眼、空棄似無情、徒
置自〔和〕塵、法皇戀古可携御覧、臣妾慕恩
可開拜見、側聞、江漢君痛　落　其沓、小原婦
哭失其　簪　、是皆非物重、盖思事舊故也、
推聖霊御意、何偏及棄置、或又、甘〔棠カ〕　勿」11・オ
剪之詠、盖是戀恩也、綿〔錦カ〕山造　屐　之志、豈非　慕
徳哉、但如此皆世俗礼儀也、全非佛道因縁、
不如書経典之文、以祈出離之縁思食者也、即仰、
親戚戀徳月卿雲客、舊勞戴恩之侍女倍
妾都五十八人、令畫法花金光両部妙典、普賢
菩薩十願真文合〇十八軸、兼又、有聖霊御悩之間
纏貴躰御服、以洗以舒奉圖普賢、其後
素之妙、偏成于宮人丹心、其畫圖之様、只出侍
女之白業、佛経之起「　」既奇異也、圖寫之輩」11・ウ
皆以為親為近、「讃之歎之、誰盡誰窮、閑以、真如巨
海本多凡下之魚鱗、無相廣濱不撰無知之螺貝、
願其受貝生類、早歸法性之波、願使其受其觸手
之芳魂、必至畢空之濱、抑今日結縁」、已上異本、入之　若男

「甘」平声

「讃之～結縁」部分を「　」でくくる。「入之」＝補入の意か。

若女、或老或少、面々屠リ肝ヲ一、各々溺ル涙ニ一、皆懐ク犬馬
慕（タフル）主ヲ一之思ヲ一、閇含蔡（クキ）メアキ藿（クワク）ヲアキ向陽ニ一之志ヲ一、霧
露深侵之間、心肝無安コト一、雲雨永散ノ後、存亡未
弁一、七々景将満ナント一、綿々恨ミ難シ休メ一、無方タ于慰ニ情ヲ一、無
處于訴（フルニ）悲ヲ一、詣禁闕一奏トスレハ憂ヲ一、龍顔先咽フ涙ニ一、」12・オ
陪テ射山ニ一慰トキニ歎ヲ一、神襟曽テ無シ安コト一、相對テ徒ニ戀古ヲ一、
交リ談テ空泣今ニ一、仍、且為思引摂結縁之利ヲ一、且為
遂報恩謝徳之誠ヲ一、殊ニ降テ綸旨ヲ一、専ラ終書写ヲ一、
娑婆ニハ随遂給使於テ今ニ一永絶ヌ、安養見佛聞法
願ハ當共ニ期ス一、我君法皇陰陽並テ徳ヲ二二十年、宴遊
合テ歓ヲ一幾許ノ日ソ、聖霊奉（ヘ奉テ）我君ニ一極メ榮路ヲ一御キ、
我君扶ケラレテ聖霊ニ一久徳政ヲ一御キ、雙（サウ）二一ノ仰君ヲ一奉ル君ヲ一、
知リ心ヲ一順心ニ一御、喩猶轉輪聖霊ノ寶女ノ觸テ衣ニ一知リ意ヲ一、
釋種阿難給仕ノ非時ニ不ルカ進ナ一、別而難忍、去而恨深、」12・ウ
閑ニ観スルニ傾ノ嶺ニ一光ヲ一、思眉月一沈之夕ヲ一、倩向テ對ヘル籬（マセニ）
霜ニ一、悲花ノ粧ノ遂ニ萎ム之時ヲ一、向之ニ一争涙不離哉、見テ
之誰カ腸タ不絶一乎、天上五衰悲ヒ在今ニ一、推之ヲ一人
間八苦憂ヘ就中尤甚キカナヤ、契テ非七夕之舊キ語ニ一、何
悵望セハ驪山之雲ヲ一、志期三明之新果ヲ一、宜會面鷲
嶺之月一、然則、五障ノ泥澄八葉ヲ一心蓮忽開、六情ノ
霜晴テ大智ニ一覺日惟（コレ）暖ナラム、三界遍利益シ、諸尊明ニ
證知シ給ヘ、」13・オ
　或本云、仍殊命男女五十八人、令寫経典一十八

「蔡（クキ）」ママ。「葵」か。「蔡」平声、「藿」入声

「進ナ」ママ

「嶺ニ一光ヲ一」ママ

軸、虚帳垂而無主、唯夕風飄幌之影、玄
堂閇而希人、獨見暁月廻軒之光、加之、
鈿匣鏡上珠壓影永絶、玉箱塵中粉
黛之具纔留、見之争涙不落哉、向之
誰腸不断哉、天上五衰悲推之○・・
乃至、五道六道悉為佛道、三乗五乗同為一乗、
云々」13・ウ

「五同院千日御講結願表白

禅定法皇白、極楽界會聖衆、法花経中三寶、
而言、春徂(ユキ)秋来、四季寒暑不常、花萎葉飛、
万物ノ零落是同、加之、有生有死、實是輪廻定
習、一ハ會一離ル、豈非閻浮ノ常習哉、伏惟、先院、
桝宮呈(アラハシ)徳ヲ一、蘭殿残■慶ヲ一、久伴茨砌之仙遊ニ一、
専恣ニス塗山之光輝ヲ一、然ルニ、今歳之天二年之暦、
夏ノ末ニ纏レテ病ニ一、秋ノ初ニ背ク世ヲ一、中陰影速盈、上品蓮」14・オ
早ク開、側(タテ、)枕ヲ一痛ミ夢不成、向窓ニ一思悲ノ難(コトヲ)盡、[ ]
芙蓉帳ノ内ニ餘香残テ而如シ未カ盡キ、戀慕ノ眼前ニ
面影(ヲモカケ)留テ猶不ス去ラ一、昔シ安置セシ佛像ヲ道場一、昨弁備セシ
香花ヲ舊跡、事變シテ儀未改ラ、悲来テ楽永盡ヌ、其
内、聖霊、去承安某年始御テ千日講経ヲ一、薫修漸ニ及九百
余日ニ一、結願ノ梵筵未ルニ展一、先院ノ花容忽陰給ヘリ、七々
修善無隙之間、暫被移修最勝光之道場ニ一、中
陰影盡之後、如本被迎佛像於仙洞ニ、見之聴之、

「○・・」＝ママ。省略の意か

■＝墨滅

恨深悲深、常ニ思マヽ食キ、保百廿之寶算、久不絶ムト一」14・ウ
乗之法音ヲ一、豈圖ヤ、未満二千日之舊修ヲ一、忽可トハ為無
主之講演ト一、向佛ニ一多シ悲一、聴法ヲ一恨切也、今日結願、
巻梵筵ヲ一、聖霊必定寶座ヲ一、詞少涙滋シ、聖衆
必照見給、

六同院御周忌中男女房一品経供養表白

南瞻部州、大日本國、禅定法皇、潔一心之御意ヲ、白
三寶之御前ニ一、前院聖霊、去年遷化シ御キ、百千万之
悲歎未盡一、三十六之旬日漸ニ近シ、夫以、生死路隔ル、
逝而無再歸之魂ヒ、廟堂地乾ス、埋而有ラムヤ不朽之貌一、」15・オ
是以、翠黛紅顔之粉、早去而無跡、妍姿艶骨
躰、空化而為土ト一、秋風驚キ春花暮ヌ、猶有一念之
不ルコト休セ一、綺羅盡テ管絃止ヌ、實悟ヌ万事之皆空コトヲ一、爰、
我君法皇、以利智精進之天性ヲ一、値ヒ御セリ有為無常之悲
歎ニ一、駿馬驚ク鞭ニ一弥更進ム八正之路ニ一、痩鴈尉ノス翅ツハサ一
忩テ欲出ムト三界之籠ヲ一、就中、修廣大之善因ヲ一、觸節一
營御鄭重之御願ヲ一、如虚空之福聚、積而不知邊
際ヲ一、過恒沙之善根、数而不可測量一、今日御願、是」15・ウ
其一也、臣妾戀恩之思、舊勞慕シ徳ヲ一之志、年ハ改トモ
其思ハ不改一、日重シトモ其志弥重、人々戴テ恩ヲ一面々未報一、
仍、自法皇女院奉始、普勧近臣侍女、御テ分テ廿八品之
真文ヲ一、為廿八軸之妙典ト一、或瑩テ玉ヲ一為軸、舒テ金ヲ一為
紙ト一、或織錦ヲ一為紐ト一、或裁テ羅ヲ一為表ト一、其書写躰、

「思マヽ」ママ

「重シトモ」ママ

文字之様、或以龍ノ盤（ワタカマレル）之勢ヲ一、成シ像教之文ヲ一、或以鳳ノ
翥（ハウツ）之像ヲ一、為（ナス）鴈行之字ヲ一、軸々綺麗、以可シ驚（カイツ）天人之眼ヲ一、
巻々厳餝ヲ一、以可宛テツ聖衆之玩（モテ■ヒ）ニ一、書ル人ハ面々雖異ト一、
皆是聖霊舊恩之倫（トモカラ）也、寫セル経軸々雖多ト一、」16・オ
莫不妙法真實之理ニ一、合力ヲ一成一部ヲ一、同シテ志ヲ一勤大善ヲ一、
号之一品経ト一、稱之結縁経ト一、盖、有所以哉、我君増シテ
仙洞之荘厳ヲ一、請霊山尺迦ヲ一、焼テ百味之香ヲ一、散ス四
照之蕚ヲ一、列ネ唐虞ノ二八ヲ、崛シテ釋氏之龍〔虎カ〕席ヲ、展一日之
梵筵ヲ一、待三寶之降臨ヲ一、執テ巻ヲ一置ケハ掌ニ、秋ノ皇随ヒ
手ニ一、解テ紐ヲ一向ハ文ニ一、朝日耀ク眼ニ一、開題開講、稱
揚讃歎、以訪聖霊菩提ヲ一、以祈聖霊得脱ヲ一、願、
平生恩顧之類、没後結縁之輩、悉［　］値遇シ七寶
階上ニ一、同ク會合セハ八功徳ノ池邊ニ一、作善類塵数也、」16・ウ
奴メ莫レ徘徊有為之郷ト一、追福如恒沙ノ一也、必親近無上
等之前ニ一、嗚呼、昔漢ノ明帝ノ擧（ヨツル）母陵一、唯有鏡奩（レム）
之空ク掩ルノミ、唐玄宗ノ歸ル馬嵬ニ一、未見玉顔之猶留ルヲ一、
古今雖異一、離別是同、歎而何為セム、宜祈菩提ヲ一、善根
有隣、功徳無絶、三界外界混一如理ニ一、五道六道
歸平等源ニ一、

七 奉為同院百ヶ日御八講結縁御経供養表白

南瞻部州、大日本國、禅定仙院、抽一心清浄之丹懇ヲ一、
企三輪相應之白業ヲ一、自去孟夏四月中旬第九朝、」17・オ
至此初商七月下旬晦夕ニ一、都一百ヶ日之間、合修二百

「モテ■ヒ」＝「モテ[illegible]ヒ」

「皇」＝「星」か

座之講演ヲ、初日写一部十軸妙典、朝ニ下墨ヲ夕ヘニ閣(サシヲク)
筆ヲ、解花紐ヲ演實義ヲ、發願ニ展開題供養之
梵筵、渉(ワタテ)五日致二時開講ヲ、積テ十座ヲ為一段儀式ト、
旬々相續テ、日々無絶コト、寫経二十部、開講二百座、
嘱四宗龍象ヲ七十三人、叩コトハ十巻難義ヲ四百ヶ条、
況、香花燈明運如雲如海之供養ヲ、唄散行道
調如法如説之威儀ヲ、今日當結願ヲ開題供養、
御筆妙法蓮花経一部八巻、開結阿弥陀、般若心等経」17・ウ
各一巻、今此妙典者、國母前院、御平生ノ昔〔琁〕宮ニ
翫月之餘リ、玉堂ニ宴セシ花ニ之隙、万機諮詢雖モ無暇、
一生歓遊雖少(スクナシ)日、四座ニ發堅固之浄信ヲ、掌中書御キ
妙法之真文ヲ、因寶塔ノ関〔奥カ〕偈至第八巻終ニ、合四巻一偈
書写御既于所残三巻三品餘、未能其功ヲ、法皇、不知(ス)シ
食聖霊ノ昔書写シ御ト云コトヲ此経巻ヲ、又不覚其品未ト云コトヲモ終功ヲ、去
年七月上旬八日、耀(ヒカリ)沈ミ暮山ニ、雲断キ陽臺ニ之後、始開
而先落悲涙ヲ、捧ケ持テ而後ニ染御神筆ヲ、終(ヲヘ)一部ノ不ルヲ満、
書シ御テ三巻ノ未ルヲ企、仍、當今日結願ニ、敬以開題供養、
嗚呼悲哉、露點未ルニ晞(ヒ)露命速ニ消ヘヌ、花紐未ルニ」18・オ
装(ヨソハ)花容忽萎ミ、以法皇神筆ヲ、継前院ノ玉手ニ、
以我君ノ丹精ヲ、輔ス聖霊ノ白業ヲ、倍レトモ功徳ハ多悲歎ハ、
満ヌレトモ善根ハ闕ヌ素懐ハ、前院昔下ニ墨ヲ御時キ、豈思メシキヤ
眼前ニ不サラムモノトハ終一部之功ヲ、法皇執筆ヲ御刻、豈圖リ御ケムヤ
夢後可シト云コトヲ補シ御三巻之文ヲ、日暮路遠、恨遺(ノコリ)悲来ル、

願大運少(スクナシ)、時移事變ヌ、拭涙ヲ祈ルノ仏ニ、含悲ヲ謝ス
法ニ、都以所修、廻施ス幽儀ニ、百日ノ講論者希代之法
會也、三界ノ諸天定影向ラム梵筵ニ、二聖ノ筆跡難値
之真文也、十方衆聖必納受(シ給ラン)唄葉ヲ、然則、早出テ」18・ウ
苦輪ヲ忙(イソイテ)乗寳車ニ、必渡業海ヲ速着ハ覺岸ニ、
受如来記ヲ、入普賢願ニ、上證菩提ヲ、下利衆生ヲ、耽(フケテ)
配月ノ古徳ニ莫留生死長夜ニ、愛シテ栢皇(サウ也)ヲ昔ノ誓ヲ莫
眠無明巨闇ニ、唯誇(ホコテ)三十二相ノ之荘厳ニ、宜極五十二位
之爵級ヲ、善根無限、功徳有餘、都一百日開講之間、
三百座舊(〔薫カ〕)修之中、烈リ座ニ臨砌ニ之倫ラ、悉預現世安
穏後生善處之益ニ、傾ケ耳ヲ合掌ヲ之者、併得ム開方便
門示真実相之悟ヲ、又経百日之旬月ヲ、多有三業之
御行善、及講経［　　］陳目六ノ旨趣ヲ、御願ノ〔旨趣〕」19・オ
取要如此、具旨聖衆［　　］見、

八 奉為同院攝州千僧供養表白

南瞻部州、大日本國、禅定法皇、抽清浄唯一之叡
情ヲ、設御ス希代無雙之法會ヲ、原(タツネミレハ)以御願起ヲ、夫、
佛種従縁起、善知識者是大因縁也、此両種金言、
共出自法花経、誠哉尊哉、我朝ニ有一賢相、即此
勝地之主、禅定前大相国也、相国、勇邁(ヨウスキ)韓彭(ハウニ)、徳
齊伊霍ニ、廻シテ謀(ハカリコトヲ)於惟帳之中ニ、得勝(カツコトヲ)於万里之外ニ」19・ウ
早鎮(シツメテ)我國ノ煙塵ヲ、永致王室之泰平ヲ、明時賞シテ
其功ヲ、授ニ以一人師範之任ヲ、黎民歸其徳ニ、委以四海

「烈」ママ

「勇」上声、「韓」平声、「彭」平声

儀刑之寄ヲ一、然而、功成リ身退テ、脱俗ヲ一帰真ニ一、早厭花
洛之囂塵ヲ、久トシム攝州之幽閑ヲ一、身雖執謙退ヲ、
子孫悉極昇進ヲ一、心雖在無何ニ、顧問猶聞(キコム)煙霞ニ、
偃息シテ而蕃(ハンタリ)我君ニ、談咲シテ退國讐(アタヲ)一、同仲連之昔ノ
蹤ニ、傳フ千木之古塵ヲ、此地風流秀出セリ域中ニ一、此
處ノ作善超過セリ海内ニ、故来ル者ハ皆心ニ忘レ歸ムコトヲ、故集ル者ハ」20・オ
悉衣嚢(ツヽム)珠ヲ一、後ニ顧レハ【　】翠嶺之挿(サシハサメル)雲ニ一、吐(ハク)暁嵐之
漠々タルヲ、前ニ望メハ有蒼海ノ混(ヒタセル)天ヲ一、呑夕陽之沈々タルヲ、
冨致千金ヲ一、相同范蠡扁舟之泊(トマリ)一、志齊シ四 [redacted]〔墨塗消〕浩ニ一、不
異袁公商洛之栖ニ、爰、我公禅定法皇、一ハ為翫勝
地之風流ヲ一、一為メニ伴カ修善之廣大ナルニ一、頻ニ臨幸シ御此砌ニ一、専
助成シ御其願ヲ一、故處追歳ヲ弥盛ニ、善積テ日ヲ更深シ、
即今年暮春之天、崛シテ金剛仏子千余口ヲ一、令修弥陀法
花両種之法ヲ一、法皇忝モ為中〔壇〕阿闍梨ト一、手自修三密
護摩ヲ一、高僧悉為助伴阿闍梨ト一、各〔耀〕五智ノ観月ヲ一、」20・ウ
三日三時、千壇千口、一心一念、周遍法界ニ、禅門大願ハ
今暁巻ク席ヲ一、法皇御願ハ今夕續座ヲ一、所謂一、
写千部一乗ヲ一、崛千口持者ヲ一、圖繪シテ三尊聖容ヲ一、磬白
三日御願ヲ一、是則、被牽人ノ善ニ一又遂ケ御我願ヲ一、千壇ノ瑜
伽ニハ即法皇忝モ為御大阿闍梨ト一、千僧齊會ニハ即仙院
又為大壇那ト一、々々即敬田也、敬田即壇那也、互為シテ善友ト一
共ニ勧善事ヲ一、法皇得ヘル禅門ヲ一、如魚ノ得カ水ヲ一、禅門値タマヘル
法皇ニ一、如舩ノ有檝(カチ)一、在テハ俗ニ一補佐シ王(王)室ヲ一、出テハ家ヲ一勧進ス

「謙」平声、「退」去声
「問」去声濁　「聞(キコム)」ママ
「蕃」平声

「續」上声

「王」をミセケチし右傍に小字「王」

善根ヲ一、此地ノ得タル此主ヲ一、々ノ々ノトヘル此地ヲ一、依正具足シ天地」21・オ
和合セリ、此地實ニ勝善根地也、此處實最吉祥地
也、不知一、昔釋迦如来轉法輪一之砌歟、不測、古ノ國王
長者修功徳之庭歟、抑前事ノ難キ忘レ一有テ、今善有廻向ノ
深御志一、國母前院聖霊、先年ニ奉テ伴ナヒ法皇ニ一、臨幸シテ
此勝地ニ一結縁此大善ニ一、星霜未〔マ、〕一、哀樂相變ス、山ノ

容モ不改テ一、波音モ無シ替コト、永ク去シ者ハ聖霊ノ御音容也、鳥

声モ重来リ、花色モ再開ク、永不歸者聖霊ノ質也、
戀慕ノ御思綿々トシテ不絶ヘ一、追善ノ御營ミ連々トシテ無止一コト、
去年ノ冬ハ幸シテ難波ノ四天王寺ニ一、果シテ御シキ逆修ノ未遂之」21・ウ
願ヲ一、今歳ノ春ハ設ケテ輪田ノ千僧大法會ヲ一、新ニ成〔正〕覺ノ尤
速ナル之望ヲ一、昔龍女カ出ル波ヲ一、早唱南方無垢之成道ヲ一、
今法皇ノ臨給ヘル海ニ一、宜導西土有縁之魂ヲ一、乃至法界平等利益、

九為鳥羽前大僧正修五十日追善表白

娑婆世界、南瞻部州、大日本國、太上皇帝、凝十善叡
襟ヲ一、潔シテ三乗之精誠ヲ一、圖佛像ヲ一寫経巻、聊ニ展供〔典〕
養恭敬齊會一、御願ヨリ々々旨趣何者、夫、恩ノ至高キハ、
無過タルハ傳法ヲ一而立行ヲ一、徳ノ尤重キハ、不如學テ道ヲ一而開ニハ悟リヲ、」22・オ
是以、常啼菩薩ノ聞般若法ヲ一、集ウテ身而申供養ヲ一、雪山
大士ノ受ル寂滅ノ之偈ヲ一、捨テ命ヲ一任ス夜叉ニ一、加之、往昔ノ大士ハ

「有」を「難キ忘」の前へ転倒挿入する記号あり

「〔 〕」＝墨線を引き右傍に「マ、」

「山」右傍に合点様の記号あり。傍点で示す

「鳥」の右傍に合点様の記号あり。傍点で示す

「音」平声、「容」平声

「潔」右傍に「マ、」

仕テ阿私仙人ニ一棄國位ヲ一作床ト一、伊吾ノ高昌ノ敬シ玄
奘三藏ヲ一臥テ玉躰ヲ一為キ階ト一、重シ法ヲ一敬師ヲ一、尚(タトヒ)道ヲ一報
恩ヲ一、自古以如是一、在今ニ一何得忘ル、コトヲ一、爰、我君太上天皇、
昔シ奉仕シ五百佛陀ニ一、宿因深萠叡慮ニ一、古ハ供養十万
如来ヲ一、善種久ク殖ヘリ神襟ニ一、志歸シ一乘ノ法ニ一、思深シ三密ノ道ニ一、
仍、随故前大僧正法印大和尚位ニ一、多受タマヘリ真言秘密軌
儀ヲ一、伏惟、大僧正者、黄流分ツ浪ヲ一、雖生ルト十善金」22・ウ
輪之家ニ一、法水尋源ヲ一、早入三密浄業之道ニ一、忍辱衣
暖ニシテ老少多ク被ル其覆(ハク、ミ)ヲ一、慈悲室廣クシテ賢愚共ニ戴
彼恩ヲ一、実是一宗之棟梁也、誰又不謂三密之龜
鏡ト一哉、然間、有待ノ身有恙(ツ、カ)一、無常難無免ル、コト一、遂當テ
七月中旬六日天ニ一、永告無常必滅ノ遷化之終ヲ一、倩思ニ之一、
五相成身之観、證五智於一生ニ一、三密瑜伽之行、超
三祇於一念ニ一、於其菩提ニ一何有所疑一乎、然而、後チ人ニ而
歎ク遊ヲ一之習、弟子之哭師之礼、阿難猶無耐(タエル)コト如来寂滅
之憂ニ一、憍梵又不忍ノハ身子滅度之悲ヲ一、我君法皇、」23・オ
既稟三密道於聖霊ニ一、傳玉ヘリ五智水ヲ於先師ニ一、善財
之志シ無盡ルコト一、常啼之思有餘リ一、故忝於十善仙
洞ニ一、修五旬齊會ヲ一事、是希代之例也、豈非重
法之誠ニ一哉、昔シ隋ノ煬帝ノ報智者ニ、感化身於千
僧之庭ニ一、今太上皇ノ訪ヒ御先師ヲ一、送遊魂於九品之
臺ニ一、聞古一視今ヲ一、同音随喜ス、三寶諸天哀愍納受、
十為穎曲御師五条尼被修追善表白

「五」右傍に合点様の記号あり。
傍点で示す

南閻浮提、大日本國、禅定法皇、抽清浄御信力ヲ一、致鄭
重御精誠ヲ一、圖絵弥陀三尊之像ヲ、模写妙法一乗之」23・ウ
文、展一日之齊筵ヲ一、白三寶之願海ニ一、夫、北州ニハ有千
年之寿一、南浮ニハ無百歳之人一、佛界ハ具（ソナヘ）常住五陰ヲ一、凡
夫ハ有無常之色身、老而無不死一者、篇鵲未施治スル老ヲ一
之薬ヲ一、會而無不別之人一、神仙何有遁ル、死ヲ一之方ヲ一、実是、
分段ノ常理也、都不可驚者歟、爰、有一比丘尼、昔近テ
龍顔ニ、奉ルニ傳一以テス穎曲之道ヲ一、久陪テ仙洞ニ一、蒙ルニ以恩
誘之仰ヲ一、傳歌ヲ一及ヒ数十首ニ、送ルコト歳ヲ一垂（ナンナントス）二十年ニ、
我君既ニ従テ彼尼ニ習リ道一、彼尼忝モ以我君ヲ一傳タマヘリ藝ヲ一、君
尚ヒテ師一施シ御恩ヲ一、尼戴恩ヲ一謝（サイ）徳ヲ一、然間、去年二月之天、中旬」24・オ
第九之夕ヘ、草菴ニ露命消、柴戸風息絶ヌ、非老衰ノ
身可キニ惜一、御覧シ馴（ナレ）タル貌難ク忘レ一思食歟、因茲、中陰景ノ
内ニ旁（トフラヒ御）弔没後追福追修善之營ヲ一、下泉之路程
忝ク送御ス弥陀経御轉讀之劫ヲ一、今迎一周之忌景ヲ一、新
圖三尊之聖容ヲ一、模シテ一乗之真文ヲ一、専祈三品之蓮臺ヲ一、
願依　我君一乗薫修之御願力ニ一、願依我君弥陀念
仏之御行徳ニ一、拂五障於南方之風ニ一、開八葉於西刹之
月ニ一、嗚呼、哥（ウタヒ）春花ヲ一哥フ秋葉ヲ一之語、僅雖傳〔雑〕穢
之曲調ヲ一、寫シ仏像ヲ一寫経巻一之善、忝致真実之報恩ヲ一」24・ウ
者也、昔調達ハ大王之本師也、授八相於無間之焔ニ一、今
禅尼ハ法皇之御師也、報一語於千金之直ニ一、知恩報恩ノ
御志、超昔超今御願也、仏法僧寶垂納受ヲ一、冥（マヽ）官

「追修善」の「追」字ミセケチ

「冥（マヽ）」（　）付きの「マ、」。書写時の注か

冥衆致随喜ヲ一、必導彼遊岱之魂ヲ一、定為（ナサム）浄土之人ト、御
願旨趣取要如此、

十二安元三年七月五日壬寅午後雨降、此日公家奉為
母儀前建春門院被修四日八講、金泥法花経
一部八巻、主上手自書写経、普賢無量両経開白
前太政大臣令書写了、被相加之御佛白檀尺迦三尊」25・オ
新造寸法可尋之 五巻日第三日 朝座法用行道僧侶下立庭上
廻池邊依無道不廻道歸只経南之庭作輪廻之 月卿雲客取捧物公卿紫袈裟甲
殿上人青袈裟甲 諸院宮御捧物皆金銀相従僧侶後本門因［ ］殿上人取之先
僧侶次諸宮御捧物 次開白御捧物右少弁光雅取之次公卿
殿上人三通了諸宮御捧物置堂中臣下捧物置
砌下敷弘莚 奉行上卿右大臣 職事蔵人左少弁兼光也
僧各 證誠四人
権僧正教縁 前権僧正公顕 法印覺智 同玄縁
講師八人
公顕前僧正 澄憲権大僧都 信円権大僧都興」25・ウ
大慶法眼 蔵俊律師興 覺冝々々興
弁暁々々東大 覺弁已講
聴衆十人 宴仁山 乗慶興 隆英興 尋思南興歟 公雅寺
覺業興 信性山 廣範 雅覺 成寶東
結願日各座御導師権大僧都澄憲説法尺経除之
〔施〕主分

夫、悲母恩徳者、内典ニモ外典ニモ倶讃之、凡人モ聖人モ
同報之、高コト々ク須弥巓ヨリモ、深キコト々溟海底ヨリモ、厚々
大地ノ隆ヨリモ、廣々虚空邊巓リモ、是以、明王［　］孝ヲ治天下ヲ、
政化非ハ孝ニ不立、浄業ハ以孝ヲ為根本ト、菩提ハ非孝［」］26・オ
不成、故、尺梵四天、誓テ常住シ孝養之家ニ、堅牢地神、
敢不戴不孝之地ヲハ、盖是、十月宿シテ胎内ニ、経三十八轉
之身分ヲ、三年遊テ膝上ニ、飲百八十石乳汁ヲ、初生テ
胎内ノ子ヲ弄コト之ヲ如琦ノ、始聞テ妶兒ノ音ヲ愛之如音楽ノ、
依彼一心之慈念ニ、長ス此五尺之形骸ヲ故也、是以、孝
子之志、孝行之道、戴之典籍ニ、遥傳来葉ニ、所謂、
忍テ杖ニ泣リ老ニ之涙、刻テ木出血ヲ之誠、埋テ子ヲ養親ヲ志、
抱母ヲ叫フ虎ニ之思等也、加之、尺尊九旬ノ安居、忉利風
長傳、目蓮七月報恩、盂蘭之露遍霑ス、覺
満漏盡之大聖スラ猶以如此、況具■凡身之人倫、豈敢」26・ウ
忽諸（イルカセニセンヤ）哉、就中、孕セテ瓊（ケイ）苗之種ヲ人、弄璋（タマヲ）之恩弥
深ク、生ル金輪之尊ヲ母、獲タル寶之喜更切ナリ、恩愛至
苦ナレハ則追戀又苦也、梁ノ武帝ノ喪（モセシ）母儀ニ、風樹之
悲尤深シ、漢明帝哭シ陰后ニ、奩（レン）鏡之涙久湿フ、
伏惟、母儀前院聖霊、徳照（テレリ）シ塗山ヲ、道光嫣納（セイニ）、
蘭夢倫結、早吴慶於綺蘭殿ニ、母徳永榮ユ、
久恣譽ヲ於尭母門ニ、流芳名ヲ於般（〔彤カ〕）管ニ、垂明［　］訓［　］於
内裏也紫宮ニ、何唯万家國母ナラム、實是兆民明主者也、

「汁」平声濁
「妶」平声、「兒」平声濁

「尺」右傍に合点様の記号あり。傍点で示す

■＝墨滅

「瓊」平声、「苗」平声濁
「喜」上声濁
「追」平声、「戀」去声、「武」平声、「帝」平声
「陰」平声、「后」去声、「奩」平声濁
「蘭」平声、「夢」平声濁　「吴」ママ　「綺」平声
「般」平声

故握(ニキリ)國ノ柄(カラヲ)於掌ノ内ニ一、弁朝政(アサマツリコトヲ)於心底ニ一、飛沈出」27・オ
彼顧視ヨリ、栄辱定ル其一言ニ一、我君常思食キ、春鶯
出谷ニ一永期シ万春朝覲ヲ一、秋月含ム嶺ヲ一久献ラムト千
秋ノ賀宴ヲ一、豈圖ヤ、去年七月上旬八日、花容忽萎ミ
秋霧ニ一、雲鬢永散トハ夕風ニ一、母是恩源也、死是
別終也、久不離一始別、常會暫隔タル、人於痛之ヲ一、
人又惜之ヲ一、況、宸儀御歯(ヨハヒ)纔十六歳、母氏仙齢
又卅五、拝覲ノ日實少ク、芳談時尤希ナリ、恨超常恨一、
悲過常悲ニ一、倩案事根元ヲ一、幽儀忽貴御コト、
為陛下母儀也、母儀又早世ヲ一、依為陛下母儀一也、以何
知之ヲ一、昔尺迦如来ノ母后摩耶夫人、誕生太子ヲ一」27・ウ
七日ト云ニ即隠ヘリ忉利ノ雲ニ一、〔経〕説其故ヲ一、一者、孕(ハラミ)万徳
円満之聖ヲ一、生テ金剛那羅延之躰ヲ一、其身不堪、其力
忽盡ヌ、故摩耶夫人速歸滅一、二者、悉達太子誕生
時、宮内現卅二奇瑞ヲ一、眼前帝釈諸天恭敬侍衛、
摩耶見之ヲ一、歓喜思余心、踊躍至不堪身故、其運
忽窮、其身速滅ヌ、以此二故、如来母儀速滅給、唯〔惟カ〕之
思之、前院聖霊又如此御歟、一者、懐ミ天子ノ貴種ヲ一
生皇子玉躰ヲ一、凡鄙ノ身難⿰糸甚(マヽ)、庸流(リウノ)質難保、

次者、自御誕生昔日、至リテ二入リ東園〔闈カ〕ニ一備リ儲君ニ一受ケ」28・オ
龍圖ヲ一踏(フムニ)寶位ニ上、身忽厳長秋啓令ヲ一、君常被致
朝覲臨幸ヲ一、其栄耀費(ツヒヤシ)眼ヲ一、喜悦迫コト身ニハ一、敢

「⿰糸甚」（　）付きの「マ、」。書写時の注か。「⿰糸甚」字は「堪」の誤字か。「庸」平声、「質」入声

不能耐(タフルニ)一、争得久保、彼如再實樹為蛆(ウシノ)一喰ハレ、重ク
載舟為被覆(クツカヘサ)一、運出テ、意ノ表ヨリ一、幸遇恩慮ニ、身極メ
奢逸ヲ一、心足レリ榮分ニ一、縦可トモ久カル争得久コトヲ一、是以、聖霊
若不奉生我聖主ノ玉躰ヲ一御者、運命何忽有促ツヽムルコト一
前院若又為我國家母儀者、寶算豈速有ヤ盡一、
聞食解此理、悲弥在我思食者歟、是第一之恨也、次
者、凡母子之道、〔晨〕昏ヲ為○、孝行之要、温清(〔清カ〕)ヲ〔為事〕」28・ウ
然、王者之習ヒ、事不叶意ニ一憚リ儀ヲ一、勞シテ心〔ヲ一優〕人ヲ一忘
吾一御故、移テ仙后ヲ一出ト九重ノ内ヲ一思食トモ、芝山雲不許サ一、
營ト孝行於万機ニ一思食トモ、蓬宮月獨幽ナリ、故、晨省(アシタニカヘリミ)
昏ニ定御ヘキ御枕モ想像ノ送歳月ヲ一、夏ハ扇キ冬ハ温ニシ
御ス勤シ猶豫シテ経フ春秋ヲ一、國母入内非時ニ一者不趣(ス)一、
聖主朝覲以春ニ一為期ト一、拝芳顔ヲ一御事、實難
有一、昵(ムツマシ〔ク〕スルコト)恩香ヲ一、尤為希(マレラナリ)、適有ルモ拝謁一、不終日不近
夜一、僅期トモ朝覲ヲ一、不述懐シテ一不盡サ事ヲ一、奏鳳舞ヲ一、
引テ龍蹄ヲ一、鸞輿高キ帰テ、花容留眼、如此之間、」29・オ
仙洞之煙霞常繋(カヽリ)叡情ニ一、射山之水石無忘ルヽコト神
襟ニ一、一人出テ、不容易(タヤスカラ)、驪宮高ノ篇在眼ニ一、遅々タル
春ノ日玉甃ミ暖ニシテ温泉満(ミテリ)、縦非トモ母儀ノ御栖ニ一為
翫ス花ヲ一、争カ無ラム臨幸御志、嫋々タル秋風ニ山蝉鳴テ
宮樹紅ナリ、縦非トモ聖霊御居ニ一為メニ嘲ランカ月ヲ一、何無賞
翫ノ御意一、故常有戀慕之叡襟一、未快昵愛
之礼儀ヲ一、是第二御欝念也、然間、去年ノ夏天、風

「○」左傍に「先ト一」。補入の意か

「入」入声濁、「内」去声濁

「輿」平声

水［　　］ニ、寝膳乖例ニ御、盡シ葛氏花化之方ヲ、
求佛法神道之験ヲ、天使〔別〕［　　］セ乎命」29・ウ
時々通ス、臥テ御悩ニ及三十日ニ間、擢叡〔慮〕ヲ［　　］千万［　　］ソ、千
度百度雖催臨幸之御情ヲ、于朝于夕雖切ナリト拝見之
御志、今旨不聴サ、旬日空積、會相隔、霧露弥
侵、不審（ヲホツカナシ）、母儀前院存何旨ヲ、不催（サシ）シ申聖主臨幸ヲ、
不知、聖主陛下有テカ何ノ因縁、不奉見聖霊病席ヲ、
是第三之遺恨也、遂使去年七月八日暮〔辰カ〕死、山川不静、
天地如動、車馬馳セ衢ニ、貴賎驟（ウククツク）路ニ、聞導（イフナラク）、國母仙院、貞
耀光沈御スト、紅粉翠黛蔵スル玄堂、見カ何物ヲ慰メム叡
情ヲ、慈愛恩念之隔ツル黄壌ヲ、待カ何時ヲ期拝観（マヽ）ヲ、昨ハ」30・オ
［　　］祈秋霧之晴ヲ、今忽悲朝雲ノ之散［　　］、万民悉為〔児〕
［　　］泣ヲ、況於万乗之孝心哉、一天併如遭父母喪モニ、況
〔於〕一門之親戚ニ哉、然而、涼闇有テ儀、禁闕忽改ム簾
〔帷〕ヲ、追善無化、姑射新錺ル幡蓋、太陽ノ光不留、中
陰ノ景早盈ヌ、傍親戚里ノ月卿雲客柳テ眼ヲ悉クニ分
散シ、近習舊勞ノ侍女倭妾分手ヲ嗚咽ス、朝暮
挙哀聲男女漸希、生死解脱計聖主獨營、
因茲、自去年八月至今年六月、抛一日万機之政ヲ學
六書八躰之様ヲ、染紫磨黄金之埿ヲ寫シ御同［　　］貫」30・ウ
花之〔文〕ヲ、観夫、白銀之堺（ケ）黄金［　　］〔照耀〕
（以下、八行白紙）」31・オ
花之文ヲ、観夫、白銀之堺（ケ）黄金之［　　］弘教〔再〕照耀、

「拝」ママ

「柳」ママ

五十二―二　山岸文庫蔵『練行啓』

瑠〔璃〕紙頗梨軸交色㆒同赫奕タリ、東雲含潤之詞、出
於天跡垂露之功ヨリ、高原須水之文、成レリ神筆臨池之
妙ヨリ㆒、知恩志深ク、御筆功重シ、縦無入木之勢㆒、以可期善
根蕁ヲ㆒、縦闕偃（エン）波之妙、以可導功徳池、况謹見御
経ヲ㆒、課テ千里之面目ニ㆒、寫セリ八蔵之肝心ヲ㆒、強鳳翥之勢㆒、成
雁行之字㆒、取ハ手ニ動感激之思、目見浮随喜之涙㆒、
一心勵誠、八軸終功㆒、至普賢無量之両経㆒者、成博
陸太閤之合力ヲ㆒、昔南面摂行朝政、相同シ姫旦之古風ニ㆒、」32・オ
今北闕助成ス君善、不異長保之舊跡ニ㆒、四海丹檝之用
[　]法水㆒添流、万機塩梅之勤調醍醐㆒増味、實
可哉、伏聞、長保昔、或命テ外戚左相ニ寫之㆒、依戚里之
親族也、或誂中書大王書之、以筆跡之真仙也、各ノ
非トモ無キニハ故㆒猶不如今ニハ、其故者、助孝行如以忠節、故撰
国家之良佐、修白善不用丹誠、故雇フ仏法之大檀、
君臣一ニシテ誠㆒、成十軸之妙文㆒、自他同志、満一部之繕寫、豈
不〔叶〕聖語誠締哉、抑又円満我君御願者也、方今、
当テ[　]装（ヨソヲヒ）成ナスニ㆒有開講設タシコト儀㆒、周辰[　]満㆒、殷憂未
休、蘆廉未改、花筵忽展、時ハ非[　]非玄〔冬〕、聖霊」32・ウ
告別初秋、所非清凉非紫宸、前院入内中殿、〔玉〕
顔[　]再不見、故迎金人㆒案之、紅裾（キヨ）去永無帰、故叩
紫濱祈之、昔拂珊瑚床ヲ㆒奉キ待母儀玉顔、今変
善根臺奉待母儀花姿、今改斎會筵崛僧侶蒔
服、佛則霊山尺迦再来五濁之忍界、経ハ是耆闍

實語重中八年之演説ヲ一、覺母ハ次六瑞於弥勒ニ一、為一
経發起之上首、願王ハ請四要於尺尊ニ、為六根懺悔之本
尊一、故、在左在右、以為理智之羽翼一、居始居終、以為妙
経之首尾、故、刻三尊レ為道場主、講一乗仰證明力、
所啒者有學無學阿羅漢、来雪山香山之雲一、所集者」33・オ
七賢七聖之苾蒭僧、出南京北京之月一、繞佛一道四
照蕚任風レ散、講経二時百和香指空レ昇、講匠
拭舌レ先説難解難入之妙理一、聴衆側耳レ次叩二重
三重之疑開、十六沙弥覆(カウ)講畳二八座開講、
智積文殊答問開テ十ニ一十口擧問ヲ一、一人合掌ヲ、群卿
傾首ヲ一、四衆圍繞、八部降臨、金章紫綬列梵
筵夜々驚顋川星、呉妭〔妖カ〕越艶進法座朝々凝
陽臺雲、御願既満、追福爰了、佛語無誤、正覺
何疑、傳聞、祇薗精舎有尺迦佛在世金字修多
羅、十方聖衆集先翫之、今見、南閻提尺迦」33・ウ
尊遺法有金言法花経、三會説法初定崇之ヲ、
給狐此ノ妙典ハ、送西ノ一極楽ノ為上品蓮臺之観、留後
龍花為下生成佛之翫、然則、此経不願籠清凉山之
金剛崛ニ、此典ヲハ不望納娑竭羅ノ龍宮ノ波ニ一、先早送
安養界之新賓御許、以令報恩之深志、以永留最
勝光前院道場一、以為開講之長御願、伏願、聖霊
依此妙功、生死夜曙、菩提日新、輪廻車止、涅槃城開、
[　]聖霊徳化夢後添光、聖霊榮耀ハ忌内増

色、其故者、扶姑射遊十年四海全無事、催陟テ〔ウ〕池」34・オ
悲二廻一天免有驚、人知之否、世悟之否、百寮箴
口、道路以目ヲ一、次、異域本朝何代無后宮、古往来今
何時無国母、彼獨后明徳二后者漢家之賢妃也、
未聞追福如此、待賢美福両院者我朝幸女也、何
無報恩同之ニレ、昔唐ノ高宗報父〔文カ〕徳皇后、建大慈恩
寺構伽藍於一千八百九十七間ニ一、今我聖主酬母儀
仙院ニ一、寫一仏乗経瑩金字於六万九千三百余言ニ一、彼
課般余功非手造、是抽報恩誠以自書御セリ、彼
梁棟又非根力貴道之材木、是點畫ハ併模真
如実相之教理、彼一時也、此一時也、雖知古之不及今、」34・ウ
同心莫不致随喜、今日者是聖霊遷化正日也、
空雲愁氣覺雨落別涙覺、今月即凉闇崩
終之月也、脱シ衣ヲ一餘惜ナコリク改色ヲ一悲深、火焼
崑岳、爍石シ碗砥モ共盡ヌ、厳霜夜降、芝蘭モ蕭艾モ同
枯、聖霊モ逝凡霊モ逝ヌ、只東岱前後ノ塊、仙骨モ
朽俗骨朽ヌ、同北芒ノ新舊塚、都水ヲ一為河卜一、水滔々
流盡、都人為世、人冊々行暮ヌ、東都妙妓、南國麗
人、蕙心玑クワン質、玉貌絳脣、皆埋魂於幽石、悉委骨
於朽塵ニ、同輦遊楽モ如幻ノ一、離宮ヲ一苦幸如夢ノ一、千」35・オ
齢盡万代モ盡ヌ、何云何歎ス、唯願聖霊列光於花
界之衆聖一、繋望於果地之三身ニ一給ヘ、非如観音之
度随類者、再莫為五障ノ女身、非如妙音ノ生後玄ニ一

「玑クワン」ママ。「紈」か

者、重莫為施六宮ノ粉黛ノ一、積善家必有余慶、
化他ノ功定歸己、君久改化世致泰平ヲ一、抑以神筆
寫妙典二、設齊會一修報恩○〔者〕、延喜天暦長保治暦
長治之五代也、検彼五代ノ御寓時、余二十年、継體于今
無絶、若是久誇帝徳、代々自然有此御願歟、又不知
依修此御願代々聖運歟、我君列五代之勝躅寫
一乗之真典、不欲追前蹤、離別悲忽至、不欲［　］」35・ウ
舊例、報徳誠自成、又依此善、不思久聖運在位
御運自久、継體胤子又不絶歟、此御願為躰、偏奉
為聖霊御菩提也、専不能献祝言、先蹤自然事、
争又不啓白哉、善根無限、功徳有隣〔餘カ〕、稚子不
残火宅、疲夫不留中路、皆遊開方後門之苑、同入
示真實相之城、両経妙典八講御願、取要不過也、
具旨任三寶照見還第八巻初又何如」36・オ

十二 永暦二年八月十七日、山上大衆為亡兒一日五部大乗
経説法也、於露地丈六堂供養、此講法之時、満山大衆
十分七八拭悲涙、事了欲退出尅、大衆郡〔群カ〕集庭中
暫抑導師、大衆出聲云々、勧賞儀可有之、衆徒被
同否云々、大衆尤可尓々々云々、仍許輿了、即時相寄輿
乗可出之由示之、雖然申為同車之由退出了、道之面
目道之光華、於斯極之、後代之人、見之必可勵此
道歟云々、

叡山童佛事「東谷兒四十九日」36・ウ

今一山三千諸徳大衆、合テ定恵之掌ヲ一、白三寶之〔境〕界ニ一、
夫、三界五趣處異トモ都是有為無常之障也、胎卵
湿化類區トモ莫不生者必滅之法ニ一、是以、十力無畏之
尊、示寂滅於雙林之風ニ一、六天浄妙ノ之楽ミ悲退没ヲ於
五衰之露ニ一、實知ヌ、大聖猶不勝無常之力一、四生令無
免コト有為之夢ヲ一、況於底下之凡夫ニ一乎、況於閻浮之
不定ニ一乎、雖知此必滅之理ヲ一、猶有迷マトフコト無常之憂ニ一、我山
中ニ有キ一ノ少兒、早出二四イ恩之家ヲ一、久栖ム四明之洞ニ一、器ノ有リ
傳道之志一、情無シ背人ニ一之色、故ニ遠モ近モ強ニ以シ憐〔愍〕之」37・オ
思ヲ一、疎モ親モ見ニ以仁愛之眼ヲ一、禅林翫花之春、人ト欲
共ニ翫ムコトヲ一、松門ニ観月ヲ一之秋、未得サ獨視コトヲ一、然間、今年
六月之天、下旬八日之朝、事出テ、不圖ラ一、例在非常ニ一、有リケン
宿悪ノ餘殃ヤ一、値ヌ怨寄之忽至ルニ一、当テ此時ニ一見者皆滞
泣シ悶絶シ、聞者悉憂悲叫喚ス、仰天一雖訴フト一大梵
天王モ無助コト、伏地ニ一雖悲ト一堅牢地神モ不答ヘ、彼東岱
送終之暮、聞松嵐一断腸人幾許ソ、北芒埋骨之
夜、拂草露流涙者是多シ、別ハ常ノ別モ無情者此
別也、悲同悲モ有余者此悲也、然間、日輪頻馳」37・ウ
羲和轡難ク留メ一、月鏡廻テハ軒ノキニ一恒娥影易移一、
千万億悲歎不半一、四十九之忌景爰来、善悪業
因未知、二十五有生處欲ス定ント、冥途何方青鳥之
翅不能至、中陰誰家紫鸞之啼無二由二趁一ト、ムル也
遊岱ノ魂キ再ヒ不可来一、荒原遠重不得返通、不如一改

「二」左傍に「|」記号あり

「無二由二趁一」箇所の返点ママ
「返」左傍に「|」記号あり

後人之悲ヲ一為ナサンニハト祈佛之誠ヲ一思食モノナリ、爰ニ諡〔諸〕徳大衆、造［　］（立）

尺迦如来五尺尊容ヲ一、書写究竟大乗数部真文ヲ一、
一日ニ終大功ヲ一、一朝ニ設大會ヲ一、自因菩提場之朝日一至マテ沙羅
林之夜月ニ一、聚一代之教光ヲ一、訪二死之速勝ヲ一、〔漸〕
頓権実之法花文、貫色一鮮、生熟醍醐之教」38・オ
露○（黙）列光ヲ一潔シ、［　］焼香ヲ一散花ヲ一開眼開題、拭涙呑
悲供養恭敬ス、花勝ニ呉山千葉之蓮一スニ、三千ノ禅徒
合掌之色、香超リ海岸六銖之匂一ニモ、諸徳大衆燋
胸之煙リ、梵尺四王降テ青天之空一ヨリ為證明一、龍（龍）神
八部ハ出テ蒼海之波ニ一助御ヘ願○（念ヲ）、願由此勝善ニ一偏ニ

導ム彼ノ幽霊ヲ一、佛ハ蓮眼僅ニ開ニ早為リ苦海之船師、
経ハ花ノ紐始テ解クニ定テ待（備給ヌラン）二彼岸之指南ヲト一、○（嗚呼）、無常ノ風怨メン、
何ソ失テン花皃於一乗之洞ニ一、別ノ路闇迷、誰埋雲鬢
於四明之谷ニ一、改シテ悲ヲ為ン誠ト、面々誰カ可不誠哉、變」38・ウ
愁ヲ一抽信ヲ一、人々何不致信哉、願不留中陰之空ニ一、速ニ
可至西方之境ニ一、蘿襟薜（ヘキ）衲昔友也、今以観音勢
至ヲ一為ヨ朋ト一、苔侄イ松扉ヒハ者古屋也、今以寶樹蓮臺ヲ一
為栖一、然則、四明昔跡ニハ縦残悲於三千之禅侶一、
九品今砌ハ必交ム膝於四十〔二〕一地之賢聖ニ、乃至法界平
等利益事趣不委、諸徳御丹誠仏経知見御覧、
次願文　次経題　發願　四仏　釈迦（本弥陀）〔当〕座

「諡」左傍に「|」記号あり。眉上に「諸」と記す、異本注記か。「造［　］」ミセケチ右傍に「立」字あり

「因」左傍に「|」記号あり

「龍（龍）」左傍に「|」記号あり

「波ニ一」の「ニ」右傍に小字「ヨリ」あり。「○」、「願由」の「願」字、それぞれ墨線でミセケチ

「待」左傍に「|」記号あり

「谷」左傍に「|」記号あり。眉上に「谷」を記す、異本注記か

「侄イ」ママ

「一」左傍に「|」記号あり

次佛ｌ　法身境妙究竟　名ヒルサナ云々境者十
十界十如也、凡夫所見有意也、有則歸無故、非究竟
非有非無、則是中道也、万法皆中道也、以之為」39・オ
為法身尺迦、報身智妙究竟〔名〕ヒルサナ、慈悲智
恵相應之義、應身大恩教主之様マヽ、如形尺ｌ、
　花厳経　大意尺名入文判尺三意アリ
大意者、我大師尺迦如来、發僧那於始心ニ、志菩提
於極果ニ一、運修行於僧祇之風ニ一、送劫数於塵
點之霜ニ一、為導忍土之郡(群カ)類、度界内之凡俗ヲ一、
未遂之前、頓大根機(地儀歟)先趣之時、佛日始出先照シ
寂滅道場唱正覚、菩提樹下示成道ヲ一、唯一之本懐
菩提高山、甘露新降［　］霑ス頓大之器根ヲ一、」39・ウ
能化ハ尊特相海之粧、未脱瑠璃之衣ヲ一、［　］居ハ帝綱
無碍之砌、暫現同居之上、頓説展席、未経漸教之
座ヲ一、厚殖比肩、無有小乗之機、是以、使十恵十林之
倫、説住上地上之功徳、加金剛幢金剛蔵之類、
説シム次第不次第之行、一心法界之月、浮影於
八會之水、三無差別之花、開色於七處之風ニ、三七日
中入如来恵、盖聞、實是最初佛恵也、豈旦非至
極大乗哉、大師尺云、如日初出先照高山、厚殖善
根感此頓説云々、佛日ノ最初ナル方勝諸経故［　］在
先故文云、一聞大智恵等云々、何況此経、ヒルサナ佛法」40・オ
界身雲在蓮花蔵荘厳、世界海於海印三昧内ニ一、

「十」衍字か
「為」衍字か
「様」ママ

与普賢々首等海會之聖衆、為大菩薩之所説則、一〔言〕
一義皆遍十方虚空法界ニ一、一品一會併満微塵
毛端之刹土、経九世十世常説音説、窮前際
後際無休無盡、唯是無盡タラニ所持也、更非
翰墨之所能記、此故円満法界談也、雖然、本
以不離迹故、寄處於七處ニ一、定時於三世ニ一、迹以不離
本ヲ一、故八會即適十方、三七日遥詠十方世、無盡而
盡々而無盡也、故海雲比丘持此経、名普眼修タ
羅ト一、以須弥山ヲ〔聚〕筆一大海水黒、一々品不可窮」40・ウ
盡故、一偈一句猶是無盡法界法門也、況七處
八會文哉、装束實滅罪生善之洪基也、以之
為大意、　題目者梵云、摩訶毘主佛陀達拏
驃阿修タ羅普王、大方廣佛花厳経、大則当
躰為目ト一、包含為義ト一、方則、徳用為名、軌範為義、
佛是能説人、覺照為名、果満為義一、花譬万行開
敷、厳喩万徳荘餝、経則聖教却名、世間
浄眼者三種、世間順耀於時光潔照明法喩
合掌故之於間浄眼、品者義類同、第一衆次初也、
故云大方云々」41・オ
入文判釈者、如真諦三蔵云、龍樹菩薩往龍宮ニ一、見此花
厳本有三本、上本三千大千世界微塵数偈四天下
厳序数品、中本有四十九万八千八偈一千二百品、下本
有十万偈卅八品、于上中二本非凡力所持ニ一、積而不傳、

下本見流布天竺、盖機悟不同、所聞又異故也、
今付此下本翻譯四本不同也、雖然、当本猶少分也、
不足譯之㆑也、初本北天竺三蔵佛陀跋陀羅此
是也、于闐國三蔵実叉難陀羅再譯舊文兼
云、覺賢譯（東晋之時）梵本三万六千項成六十巻者
補諸闕㆒、然翻四万五千項、全成八十巻者是也、」41・ウ
今所書写、覺賢三蔵所翻本也、此〔経〕六十巻
卅四品、大分有七處八會㆒、七處者、人中三處、寂滅道
場、普光法堂、給孤獨園重閣講堂也、天上四處
者、切利夜摩、兜率、他化自在天宮是也、八會者
七處之中六處各有一會、此外普光明［　］（無）二會
故成（八）○會也、若分三段者、世間浄眼品是序分也、
ルサナ佛品已下為正説分、流通ノ有無、解尺不同也、
或師、以入法界品巻末後偈頌為流通、或師云、此経ハ
法界法門故法無盡故説又無盡、無有休息故無
流通分也（云々）、三段略以如此、地蔵菩薩於冥土〔為〕［　］」42・オ
王氏授此経一偈云、若得此偈能排地獄
若人欲求知・・・　（義）聲所及罪苦衆生得解
脱㆒、即夜摩天宮無量諸菩薩霊集説法品文也、
自是後名破地獄之偈ト㆒、凡ハ受持讀誦之處（二ハ）
感摩必至リ、解説事写之人霊端三方顕、先晋
覺賢三蔵、翻譯此経時青衣二人童子出池
中毎日致香花供養、于闐國三蔵実叉難

「明［　］」を墨線でミセケチ、右傍に「無」字

「獄」字の下、二格分空白
「・・・　」ママ

陀、依則天皇后ノ請ニ一譯シカハ此経ヲ一、香水雨降空ヨリ一、
園中亦生百葉蓮花、魏朝霊菩薩行此経六年、
面見大聖文殊之来「北（不處之）天恵燈索此経数歳○、得」42・ウ
「夢善財童子之薬【　】誦此経命終者、或舌中
生五茎蓮花、口中生百粒舎利、爰或人為讀
此経洗手ノ水滴自然湿蟻子ヲ一云々、即生切利天云々、
聞大方廣仏花厳経、七字者決定不随四悪趣有也、
誦持浄眼一品其人已○（同）菩薩浄戒ヲ一、書写徳円法師
書写数行毎字皆放光明、修徳禅師書写カハ
一部開経蔵ヲ一、放大光明照四十余里ヲ一、代及末代、霊
験即不トモ新一、真文不改勝利有何疑耳、
梵網【　】成花菱ヲ一也、所説ヒルサナ佛、心地法門
菩薩十重四十八軽戒也、臺主ルシヤナ授千花葉」43・オ
尺迦牟尼佛子、尺迦傳授千百位小尺迦此戒、名【　】
常経金剛寶戒ト一、諸佛本源菩薩本源一切衆
生心地仏性也、不殺不盗等ノ名一往雖似小乗戒律ニ一
其躰永異、不聞戒如瓦器一破無力、円乗菩薩
戒品受法有（歟）無権法、破之雖随三途一、在鬼趣
為鬼王、在畜生趣為畜生王、乃至至無上佛果ニ一
其躰永無苦、以説此戒品為経大意、菩薩律儀
適防三業ヲ一、々々中意業為主心王、意識躰一異
名也、故云心地品也、此経大本一百一十二巻六十一品

「北」字上に合点の記号あり、カギカッコで示す　「○」ママ
「夢」字上に合点の記号あり、カギカッコで示す

唯第十菩薩心地品、具譯應成三百余巻法師寺」43・ウ
義學沙門三千余人、遂〔終〕逍遥國草堂寺翻〔譯〕
五十余部経論云、最後仰秦王〔欲〕受禁戒別
誦出之恵融等筆受為上下両巻、序上巻菩薩
階位ヲ、下明菩薩戒法、十重四十八軽也、

大集経

大意者、部属方等ニ、機亘四教、弾呵褒貶之教、
大乗生蘇々之法也、謗三藏漸滅之非ヲ呵小乗保果之
[　]ヲ、遠期醍醐之一味、深志円実之方便、故尺云、
於権教中雖云貶柱（敗種依之理）以佛実智而発動之云々
経云、若有衆生受持此経、不過七仏同菩提起云々如此」44・オ
為大意ト、題目者、大意有三蔵（大多勝也）方等者方[　]
也、般若有四種方法、謂四門、清冷池即方也、所契
之理平等ハナル即等也、故大乗法平等之理、名方等也、大集
者可有事理、浅深之尺、一者此経廣集十方諸（大イ）仏
知法菩薩悉已大集云々、一住順経文ヲ、又可有尺、大集
菩薩出欲色二界大空亭中、故云、大集故撿経文云、
名只是可名甚深法門也、経者如常、陀羅尼自在
王菩薩品者擧人為品名、此菩薩得甚深妙■持於
国行化他自在無碍也、故得此名、品者ー第一之
故云大方・・・　第二入文判尺者、案梁沙門
僧祐記此経有十二段説共成一経云々、第一」44・ウ
瑠璃品、第二陀羅尼自在生品、乃至第十一大寶髻品、

「大意有」の「意」字を墨線にてミセケチ

「■」＝墨滅

「・・・　」ママ

第十二無盡意品也、今［　］授経見文〻、与彼記不同［　］
此経巻軸不同也、無定分、或廿九、或卅、或卅一、或卅二、或
四十巻、今流布多分卅巻也、仍卅巻流布本有十一分、
第一タラニ自在王菩薩品、第二寶女品、第三不眴品、第四
海恵品、第五虚空蔵菩薩品、第六無言菩薩品、第七不
可説菩薩品、第八寶幢分（此一分中又、有十三品）、第九虚空力（自イ）品
（此一分中又有、九品已上卅巻）、第十日蔵分十巻（此中又有、十三品）、第十一月蔵〔分〕
（此中赤有、十八品）、貞元録分為十六分、不叶此流布本、経文云、
我以佛眼所見衆生、若有能教盡成尺梵所得」45・オ
功徳不如書写、持此経者功徳　○　又云、無言童子
云者八歳来詣佛所（云々）、

瓔珞経

大師尺云、恐是結諸方等大乗別円之位、又指花厳、
七處八會皆云、昔尺云、以瓔珞経結諸方等故、指花
厳、以之、為［　］猶隔鹿園玉王在後道理如然（云々）、
五十二位名載装束猶在此経、元暁師（云）、六性六忍
綜八會之廣宗、三諦三観貫六百玄宗（云々）、
凡朕大意者、鹿薗十二年之後法花八ケ年之前、出」45・ウ
四處十六會之中、卅［　］年久［　］之、始自色心終至［　］
智、菩提攉万有於性空、濫一善於畢竟、三教雖［　］
同被盡浄虚融、諸機雖區共悟畢竟空寂（ヲ一）、
實是苦海之船筏也、菩薩之智母也、今経者与十
六會中第二會同本異訳也、題目者摩訶者

「○」ママ

有大多勝三蔵、般若者智恵、波羅密者到彼岸事
究竟義経以下如常、此経有三教、到彼岸不同、
通教三乗シテ無生智恵之船ニ一、渡四住之流到有余無
余之彼岸、別教、菩薩乗次第三観船筏、次第亘四
住塵沙無明之流、到中道之彼岸、因人以一心三観〔船〕」46・オ
筏、一時截三惑之流、速到中道之彼岸ニ一也、入文判尺
者、此経一部四十巻或三十巻、八十九品結集宗本唯三品
一■二魔事、三属累、什公譯之依四意人義法事
開成十九品、龍樹菩薩製千巻論尺之大分一経、為［　］
始自佛告舎利弗至于属累品已来、凡有六十五
品、名般若道、次従不盡品已下訖後属累品、有廿四品、
名為方便道、般若道者、弁其入実之功、方便道明其功用
不訖也、又分三段、始自如是我聞至一切皆集、是序分也、
従佛告舎利弗已下至于曇無竭品末、是正宗也、
擧因果諸功徳法門勧於菩薩当学勝也、後属
累品、流通分也」46・ウ
仁王般若ハ、諸部般若〔結〕経也、三十年之後別説此［　］
十六會之外［　］宣此典、五忍功徳之花匂重薫霊
峯ニ一、二諦質照之月光再耀耆崛之洞ヲ一、譬鏡
則咲楊州之銅、譬珠又嘲連城之光ヲ一、不能委、
次法花経開結二経　如常
次涅槃経　大意者、金剛解脱諸佛秘蔵也、鷲峯
開題之後、調後番〔香〕醐之機ヲ一、鶴林捃拾之席、

■＝庎（「序」か）「三」ミセケチ

令悟仏性円常之旨ヲ一、所説者、一切衆生悉有仏
性之理、所述者、大般涅槃三徳秘蔵之教也、闡提」47・オ
二乗之〔倫カ〕〔　〕皆預如来之遺言ニ一、六師十仙之類悉帰
常住之妙理ニ一、盖是、贖命之重寳也、最後之金言
也、題目梵云、摩訶般涅槃修多羅此云、大滅度也、大ハ
法身、滅ハ即解脱、度ハ即般若、又大者三徳皆大也、
滅者三徳皆寂滅也、度者三徳皆究竟円満、
経者云々　此経翻譯有十四代、其中天竺三蔵
曇無纖値白頭禅師云々　入文断簡章安
大師分為五段、召請涅槃衆、開演涅槃陀、示現涅槃行、問
答涅槃義、折摂涅槃用、自如是我聞至流血灑〔　〕涅槃衆
純陀品至大衆問品開講、〔　〕徳王品示現、師〔　〕」47・ウ
孔一品問答云云、謹迦葉〔　〕経折摂云々、此経ハ為諂誑〔　〕
書写猶有甚深利益、況今日書写功用、抑兼知之
誰化因縁親子相者ハラ門之因解尺之、
遺教経四見不同、五部大乗、大略如此、三千衆徒為願主一日
写五部之妙典、御善根起ト云、法會アサナト云、都希代之
勝事也、詞殊不能述事、至才浅不能盡旨趣、愳
許一座之導師、謬々万代之謗ヲ一、今案此事、見涅槃経
梵行品文、被思合第一心奥此因縁アリ為半偈猶
捨金身、况於書写二百軸究竟大乗哉、幽霊若
在父母家ニ一死ナマシカハ何必有〔　〕善、幽儀若在他山寺爰」48・オ
更無如此訪歟、漢日碑之子日弄児値被害父不憂、

唐白氏之[ ]名亀児病シテ死カトモ親又[ ]過キ、以之思此○
我山ノ人無定人、自西海東岳来、器無定器、勤者為麒麟、
〔懈〕者為驢馬一、故一人小児アタナル事ナシ、誰知将来法燈、旅
客賎人オロカナラス、自為一宗棟梁、我山人法繁唱、偏依此一
事、故来ヲハ不論貴賎、ハクミ住スル人ヲハ不謂老少、哀ヘキ
ニテ候、付中少人ナトノ事ニ成ヌレハ一キハ別事候、秋山嵐寒
ケレハ畳三衣暖之、暁爐煙絶ヌレハ譲麻倉ヲ一養[ ]
事也、縦雖有情以麁語不諫イサメ一、縦雖有告礼以テ励
法ヲ一、不誡コソ、僧中定習ニテハ候　○　一切衆生無始已来、空
為四大毒虵所誤、徒為無[ ]邪鬼所呑、骨積高山ヲ
未埋、仏法流布之地、涙流如海未泣、為ニハ生死[ ]〔丶〕」48・ウ
訪挙世如蜉蝣、于朝于暮苑別者幾哉、而、霊〔骸〕埋
一乗之峯、為トモ〔安〕為転法輪之敷地、魂留四明之洞、[ ]トモ〔高〕
自殖解脱分之種、何況、一山禅徒惜別、實是一佛浄土之
芳縁也、三千法侶含悲、不慮資九品浄土之勝因、
抛三衣一鉢之畜、合力營如来卅二相之形、出百界千如之
窓、分手寫二百余軸之文、万字千輪新来、蓮偈花
文速成、三千人之中丹ヨリ起、写此善根於ハリ鏡之面、
十六大夫傾首テヤ随喜シ給ムラ、寄此功徳於慢陀憧[ ]ニ、
四鎮八王合掌礼拝ハム、大千世界中、亡其命者是聞トモ
一閻浮提之間、得此訪者定少トソ覚歟、童子齢十四才、
六情根之霜不哉、僧徒誡ハ三千人、三菩提月忽円ナラム、」49・オ
但離苦得楽之道、以此善根無トモ疑一、戀慕悲歎之情、

「○」ママ

「　○　」ママ

経瞻劫[　]盡者也、花下半日之客、猶怨別於夕風ニ一、
月前一夜之友、惜散於暁雲、一夜會合一度遊宴
タニモイカ、ハ、以、松門接軒朝暮見訓ケム、人イカ故カハ
思食ラム、求影無見、空残舊照鏡ヲ一、尋聲ヲ不聞、只
留古讀書ヲ一、戯ニ壁上書写露點有跡、遊ニ籬中
裁菊黄花開テ無ラムトス主、夕陽透黄〔桐〕怨見怨色
也、夜虫鳴闇叢悲聞悲聲、仰空詣天團々、暁
月不言、拭涙凝思眇々、暮雲無語、前途何處
為生死トヤ為涅槃一トヤ、後會何時非春風非秋月、一生
遂ニ隔之怨、袖上雨難乾、〔千載〕永往之悲、胸[　]」49・ウ
火何消ム、宿縁無朽者、契再會於一佛浄土之風、
機感有交者、期値遇於無生法忍之月、善根無根、功徳
有憐、三界共導四生同利ム、
経説雪山童子因縁中ニ、雪山童子誦ルヲ羅刹諸行
無常是生滅法半偈聞了、心生歓喜踊〔躍〕無量
譬如久病未遇良醫者率得之、如渇乏人遇清
涼[　]、如怨遂レテ忽得脱、如久繫獄率得出、童子聞
此半偈、心生歓喜心亦如是、従座起四向顧視唯見
羅刹更無余人、即便前至此羅刹所、作如此言、善哉、
大士於何處得此半偈、如意珠是半偈義、乃至過未来
来現在諸佛世尊正道也、但文義未盡、願具■是説」50・オ
説、尓時羅刹答云、汝今不可問我是義、何以故我不[　]
来已逕々有日處々求索〔丁〕不得能、飢渇苦悩心乱調

「唯」ミセケチ

「来」衍字か

「■是」墨滅の右傍に「是」字

「説」衍字か

語非我本心之所知也、童子請言、若能為我説是偈
[　　]、我当終身為汝弟子、汝所説者名字不終、義亦
不盡、以何因縁不欲説耶、羅刹答云、汝智大過、我
定為飢苦所逼實不能説、童子問云、汝所食者為是
何物、羅刹言、汝不令問、我若説者今多人怖、我復
唯言、此中獨所更無有人、我不畏、汝何故不説、羅刹
答云、我所食者唯人煖肉、其所飲者唯人熱血、我後
語言、汝但具足説是半偈、我聞偈已、当以此身奉
施供養大士、我雖命終、如此之身無後用、当為虎狼」50・ウ
鵰鷲鵄梟之所噉食、而後不得一毫之福、我今
為求阿耨菩提捨不堅身以易堅身、羅刹答言、誰当
信汝為八字故棄所愛身、善男子我即答言、汝真無
智、譬如有人施瓦器得七宝器、我亦如是、捨不堅身
得金剛身、汝言、誰当信者、我今有證大梵天王尺提
桓因及四大天王、能證是事、後有天眼諸菩薩等亦能
證[　]、後有十方法界諸佛世尊、利衆生者亦能證
[　　]字故於此身命云々、羅刹為説言、余半偈生
滅々已、童子聞已若樹若石書写之即上高樹捨
身与羅刹云々」51・オ

(白丁)」51・ウ

「右練行啓一巻憑木村太七講得之

延寶八年庚申冬十一月」52・オ

練行啓　一巻　彰考館本也　下欠者歟
去八月下浣　探訪之序借来　十月廿三日
依嘱原田暁翁書写者也　十二月六日書了
持参云々　海草集二巻同時也
不聞有類本全稀覯也云々
昭和十七年　十二月九日暁天記之
岸廼舎

与海草集筆者異者也
叡山児佛事文ハ校正アリ　薄墨ニテ記入ナリ

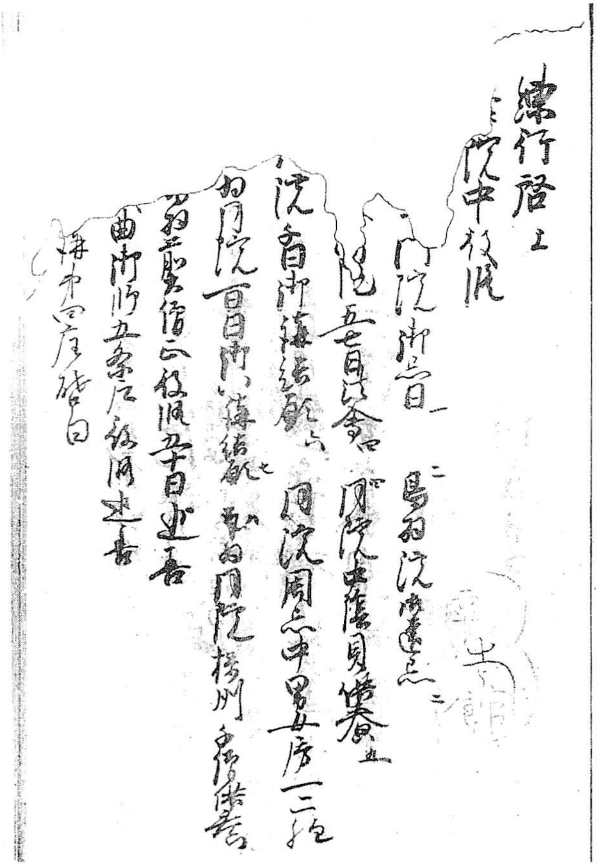
大呂　廿一日廿三日校訂
廿四日校訂午前中
廿五日午後一時廿分　一校了　蠹蝕満紙不容易分讀
雖疑問非無以之(之)類本不可校訂者［　］云々」　52・ウ

昨日午後至圖書寮借来左書云々
山下水　廿二冊
詩歌講師部類抄　二冊
続万葉集異本考一冊
後撰集作者　一冊　」53・オ

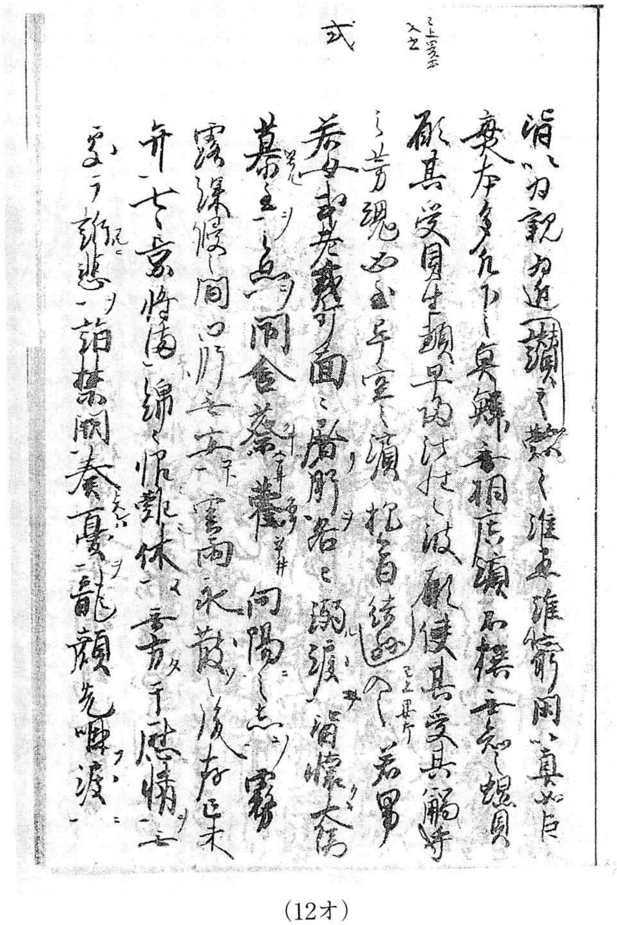
（白丁）」53・ウ

＊　＊

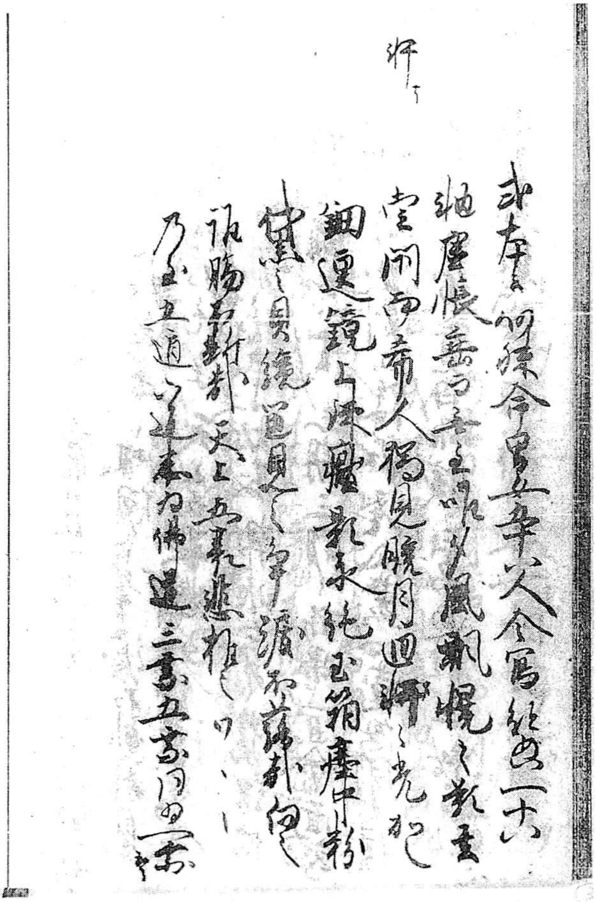
本翻刻・解題紹介に際しまして、貴重な典籍の閲覧・活用の御許可を賜りました醍醐寺・東寺観智院・東京大学史料編纂所当局に対しまして厚く謝意を表する次第です。



（1オ）



（12オ）



（13ウ）